個の人体有りて僵臥せり。

四名暫くは一同身動きだも得せず、無言にて石像の如く行立せしが、既にして、亦た一同、無言のまゝ徐々歩を移して、かの人体のかたに近づき前みぬ。

四名は人体に近づきて、既に相距るを七八間の處まで來りしをり、渠等は何故とも知らず、俄かに渾身打ちわなゝきて、恐ろしきを言ふばかりも無く、復た一歩を前むるを能はざるやうなれるにぞ、其の果して事斷れたる屍体なるや、或は尚ほ一縷の氣息の其の口鼻の間に存するもの有るなきや、否やをさへも、問ふに遑あらず、一同驀然身を飜へして、茂林の中に遁げもどりぬ。今や四面濛々として全地夜色のために罩まれ、時々閃然やみを照射したりし電光さへ今は全く息みて、復た咫尺の間を辨せず、唯だ風號濤擊の聲の、獨り暗中に跳梁跋扈するのみ。

第十一回

闇中の討論　○天明　○屍体の失踪　○桑港の一商船　○佛人洞の掛念　○大紙鳶の製作　○林中の一婦人　○圭兒の物語　○七個の殺人賊　○夜中の航行　○岸上の火光　○亞米利加虎　○親切の温と倨傲の氷　○四童子の復歸

何等の恐ろしきあらしなるや、大樹喬木の吹き折り吹き裂かるゝ聲、遠近四方に相呼應し、今にも全林中天に捲き去られむかと疑ふばかり。杜番韋格乙部虞部が茂林の中に立ちをるは、甚だ危きに似たりと雖も、濱邊は更らに烈風に煽起されたる奔砂飛石、散彈の如く來りて人の面を撲つ有り、片時も停まり處るべからず。四人は一大山毛欅の下に行み立ちしまゝ、曾て一瞬の間も敢て睫を合はさずして、以て天明に至りたり。

四人が終始心に關して通宵眠る能ざりしは、獨りあらしのためのみにあらず。抑も彼處に打ちあげられたるボートは、何國より來れる者にして、其のかたへに僵臥せし二個の破船遭難者は、何國人なるべき歟。渠等の此處に漂着せしより之を推せば、果して本島を距るを遠からざる處に、他の島或は大陸の在る有

りし歟。風の較や吹き衰へて、稍や人語を聞くを得べき間だ〳〵に、渠等の熱心に相語るは唯だ斯の一事のみ、時ありて渠等は遠々地に人の喚ぶ聲を聞ける如く覺にしも、啻に一度二度のみならず、或は是れ渠等二個の外、尚ほ幸ひにして生存せる者ありて、濱邊を彷徨するに非るなき歟。渠等は再三耳を傾けて、熱心に其の聲を追ひ索めたり、然れども是れ皆な渠等の幻聽なりしなるべし、渠等は只だ依然たる颱號濤擊の聲を聞くのみ。

渠等は嚮きに謂れも無き畏怖の念に制せられて、ボートと人体との狀を熟査するをもせで、却走し去りしをの愚かさを悔ひて、更らに濱邊に尋ねゆかむと欲したることも數たびなりき。然れども此の如き冥々寸前の物を視るを能はざる暗中にありて、此の如きあらしの中にありて、渠等は能く何事をか爲さむや。渠等は何に由りてボートの在る所を知り、何に由りて人体の在る所を知らむや。待ちに待ちたる曉光は、やう〳〵東の天を染めて、一世紀よりも長く覺えたる夜は、やう〳〵明けはなれぬ。風は少しく勢衰へたるも、斷雲低く頭を壓して、奔馬の如く飛び去り飛び來るは、大雨の將さに至らんとするを豫示せり。四人は動もすれば疾風に吹き倒されむとするを、互に相扶けひきつゝ、濱邊に出でゝ先づボートの在る所を索むるに、ボートは昨日見しよりは、更らに幾間うへに打ちあげられたる如く、且つ砂上にのこりたる海藻の迹に由りて之を觀るに、進潮の時に於ては、海水は昨日想ひしよりも、高く濱邊に打ちあぐることを知れり、然れども二個の人体は何處にゆけるや復た影をも留めず。

四人は濱邊を東奔西走して、遍ねく之を索めたれども、曾て足跡だも發見する能はず、無情なる海水は夜中渠等を引て、遠く雲濤茫々の外に去りたる歟。韋格「可憐生、渠等は或は猶ほ一縷の氣息の存する者ありしやも料り難きに」。杜番は濱邊に凸起せる高岩の上に登りて、海上を展望せるが、只だ一樣の澎湃たる巨浪、無邊に起伏するを見るのみ。杜番は此處を下りて、三人の立てる所に返るに、三人は方さにボートを圍みて、其の内外を檢しをり。ボートは長さ五間許の傳馬船にして、帆檣折れ、右舷いたく壞れたれば、更らに修繕を加ふるに非れば復た航海に用ふべからず。船内には唯だ帆及び帆索の斷れ〳〵になりて散落せるが有るのみにて、食物割烹具或は武器の類は、一點も有る無し。檢

して船尾に至るに、數個の文字あり、蓋し斯のボートが所屬の母船の名、及び其の本籍地の名を記せるなり、歴々として猶ほ明かに讀むべし。曰く、

セベルン號　サンフランシスコ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

四童子をば暫らく斯の濱邊に留めおきて、余輩をして且らく佛人洞に返らしめよ。却て說く、佛人洞なる諸童子は、四人の發足したりし後、皆な鬱々として樂まざる色あり、殊に尤も打ふさぎて見にたるは武安なりき。吳敦は武安の心を推して、百方之を慰めて「武安、しかく鬱々たる勿れ、杜番剛愎なりと雖も、來冬の冬ごもりまでには、必ず再び余等の許に歸り來らざるを得ざるべし」。然り是れ甚だ理有るの說なり。渠等が單に四人の力をもて、彼れが如く險惡なる嚴冬の亙寒と鬪ひて、能く之に抗し得るや否やは、尤も覺束無き所なり、吳敦の說は實に理有り。抑も渠等衆童子は、來冬も亦た一冬を斯の孤島に送らざるべからざる歟。渠等は到底外援を得るの望み無き歟。太平洋の此邊は終に船隻

の來訪を望むべからざる歟。アウクランド岡の頂に植てし信號は、到底人の目に觸るべき望み無き歟。一日武安は諸童子と談りて、斯の事に及べるとき「アウクランド岡の頂なる信號は、海面を拔くこと二百尺に過ぎざれば、極めて短距離の間に來りたる船隻に非るよりは、之を望み視るを能はず、頃日余は一計を案じ出だせり、幸ひにして余等は多くの帆布及びリンネンを有すれば、之れを用ひて一個の大紙鳶を造り、以て空中に揚げむには、能く一千尺内外の高さに揚ぐることを得べし、是れ更らに遠距離の人の眼を惹くを得ずや」。紙鳶は勿論無風の日は之を揚ぐる能はざれども、無風の日は甚だ少きに加へて、唯だ風有るの日のみ之を揚ぐるとするも、全く之を揚げざるより、愈れるを萬々なるは言ふまでもなし。諸童子は一同武安の說を贊成して、馬克太を棟梁として、直ちに紙鳶の製作に着手せしは、杜番等四童子が佛人洞を發足せし翌日のをなりき。

かくて十五日の午後には、一個八角形の大紙鳶出來あがりぬ、紙鳶の大さは、殆ど童子等の一個を其の背に負ひて空中に揚がるをも能ふべく、之を一千尺の

高さに放たば、五六十マイルを離てゝ人の眸に入るを能ふべし。此の如き大紙鳶は童子等の力をもて、之を挽くを得べきにあらざれば、其の線は、絞車盤を用ひて之を伸縮すべしといふ。翌十六日は即ち始めて斯の大紙鳶を試み揚ぐべしとて、幼年者等は喜び懽びて、臥床より起き出でしが、是日は朝來天氣不穩にして、午前よりは全くあらし模樣となりしにが、渠等は紙鳶を試み揚げむなどのをは想ひもそめず、終日洞内に蟄居せり。

十六日の夜は、終夜天氣あれ續きしが、翌十七日は朝來風勢次第に衰へて、午後一時に及ぶ比ひには殆ど常に復したりしにが、童子等は皆な洞外に出でゝ、正さに紙鳶試揚の準備に孜々たるをりから、如何にしたりけむ獵犬フハンは、二聲三聲高く吠ゆると見にたりしが、忽ち身を躍らして、驀然茂林の中に跑け入りたり。武安「フハンは如何にしたるならむ」。吳敦「何等か獲ものゝ香を嗅ぎしならむ」。武安「否な、常の吠ゆる聲とはいたく異なりたり」。左毗「請ふ往て動靜を察む」。武安「先づ武器を取り來りて」。言下に左毗と弱克とは、洞に走せ歸りて、各一個の裝藥せる銃を取り出だし來りたり。武安「來れ」、三個は吳

敦と打つれて、今まフハンの跑け入りたる陷穽林の南端に進み入るに、フハンの仍ほ頻りに人を喚びて吠ゆる聲、近く樹を隔てゝ聞ゆ。四人は行くを未だ半丁ならずして、フハンの一大松樹の下に停まり立てるを見たり、更らに眸を定めて熟視するに、樹下に一個の人の形ありて横はり臥せり。是れ一個の婦人なりき。身には粗布の服を着けて、茶褐色の肩被を纏ひ、年齢四十乃至四十五なるべし。面上に苦惱の痕を留めて、顏色いたく憔悴し、氣息は猶ほ微かに通じつゝも、死人の如くなりて昏倒しをるは、蓋し疲極まり、若くは飢極まりて、此に至れるものなるべし。抑も童子等が斯の島に漂着してより、一行の外に、人といへる者を見たるは、是を始めとすれば、之を見たりし四童子が、心の中に感愴悲喜交も至りて、暫しは物さへ得言はず、茫然として佇立せしは無理ならず。

吳敦「渠は猶ほ呼吸す、渠は猶ほ呼吸す、蓋し餓極まりて昏倒したるものらしければ」、言未だ全く訖らざるに、弱克は忙はしく洞に走せ歸りて、若干の乾餅と少許のブランデーを取り來れり。武安は兎角して婦人の口を開きて、幾滴の

ブランデーを澆ぎ入るゝに、婦人はやがて少しく身を動かし、眼を開きて、呆然四童子の顔を看まはせり。既にして渠は弱克の進むる乾餅を取りて、忙はしく之を口に運びつゝ殆ど一氣に之を嚥下せるは、其の疲れよりも、寧ろ餓ゑのため困衰せし者なるを推すべし。

婦人は之をたべ畢りし後、半ば身を起しつゝ明白なる英語をもて「多謝諸童子、多謝」。

半時間の後は、婦人は佛人洞の内に於て、衆童子の看護の下に、臥床の上に安息しつゝあり。既にして婦人が稍や氣力を回復して、能く自由に談話を操るに及びて、衆童子に向ひて始めて語りし所の渠の經歷を、一括すれば乃ち左の如

くなりき。

渠は亞米利加の人にして、名はカゼライン、姓をレーデーと呼べるが、渠の朋友は皆な渠の名を略稱して圭兒といへり、圭兒は二十數年來紐育州の首府アルバニーの一富人ペンフヒールド氏の家に奉公して、女執事をつとめしが、今より一個月前、ペン氏夫妻は智利なる一親族の許に音づれむと欲して、圭兒を從がへて、カリフホルニア州桑港に來りて、便船を求めたるに、適まセベルン號なる一商船の、智利なるヴアルパライツに向ひて、開行せむと欲するを聞きて、之に附乘せむをを請ひて、船長タルナーの允しを得たり。セベルン號は船長タルナーの外に、二

名の運轉手と八名の水夫とを有し、船員通計十二名と、ペン氏夫妻及ひ圭兒、合せて十四名の人を載せて、桑港を拔錨せるが、桑港を發してより十日許を過ぐるほどに、水夫の一個名を倭東と呼べるが、他の水夫を煽動して、恐ろしき謀反をたくみ、一夕八名不意に起りて、船長タルナー一等運轉手某及びペン氏夫妻の四名を銃殺して、セベルン號を奪領せり。圭兒も險些兒擊ち殺さるべかりしを、福倍と呼べる一水夫の、間に居りて他の水夫をなだむる有りて、僅かに免かるゝをを得たり。二等運轉手の伊範といへるは、年齡三十前後にして、温良の人なれば、勿論始めより斯る恐ろしき謀反に與みせず、然れども惡人等は斯の人をも併せ殺すときは、船を操るを能はざれば、白刃をもて之を脅やかしつゝ、強て船の運轉を司どらしめぬ。是れ十月八日の夜の事にして、セベルン號は是時智利の海岸を距るを二百マイルの沖にありき。蓋し惡人等の目的は、斯の船を奪領して、南亞米利加及び阿弗利加諸國に去來して、是時まで是等諸國には猶ほ密々地に行はれをりし、奴隷賣買を營まむと欲するに在り。是等は其の開手として、先づ此よりホルン岬を遶りて、阿弗利加の西岸に往かむと欲せしなり。

かくて三日許走りゆけるに、何故とも知らず夜半船上俄に火發りて、看る〳〵早や煙焰船を裹みて、到底復た救ふべからずなれり。水夫の一名へンレイといへるは、是時火を逃れむと欲して海中に跳り入りたるまゝ見ずなりぬ。自餘七名の水夫は僅かに若干の食物と少許の武器彈藥を取り出だし得たるのみにて、折角に奪領したりしセベルン號をば、空しく火中に打ちすてゝ、傳馬船に乘り移りぬ。是時最近の海岸も、尙ほ相距る二百マイルの外に在り、渠等の心だのみ少きを、言はむもさらなり。若し斯の同じ傳馬船の中に、圭兒伊範の二人無からしめば、斯の傳馬船をして斯のまゝに海底に沈ましむるも、誰れか之を天理の正ならずと謂はむ。傳馬船の海上に二晝夜漂流したりしが、更らに大あらしに遭ひて、其の帆檣を吹き折られ、遂に再び自由に運動する能はざるに至れるにゞ、此より後は日々夜々、風潮のまに〳〵蕩去し蕩來されて、終に斯のエイアマン島の北濱に吹き着けられしは、一昨日即ち十五日の薄暮なりき。是時船中の人は、皆な連日の疲勞と食物の缺乏とに由りて、殆ど死人の如くなり

て、縦横に僵臥しをり、船の將さに濱邊に打ちあげられむとするとき、一堆の奔濤來りて船上を飛過せしをりは、六名の人は脆くも其の捲き去る所となりて忽ち形見えずなりぬ。圭兒は二名の人と共に船に載せられたるまゝに、濱邊に打ちあげられたるが、圭兒は船の一方に投げ出だされて、沙上に輾轉したるまでは覺えをりしが、昏絶して其の後の事を辨まへず。頃ありて心つき眼を開き視るに、他の二名は亦た已れと反對の他の一方に投げ出だされたりと見え、船を隔てゝ數間の外に同じく仆れてをり。圭兒は心つきながらも、仍ほ欹立せる船の底に身をよせて、依然沙上に僵臥せしまゝ、越方行末の事など靜かに思ひつゝ天の明くるを待ちたるに、曉三時に至りて、忽ち瑳然たる足音あり、次第に此方に近づき來る如し、耳を欹だてゝ之を聽くに、豈圖らむや、是れ嚮きに浪に捲き去られて、海中に沒したりと思ひをりし、倭東等の皆な無事に濱邊に泳ぎ着きをりて今ま船を索めて此處に來り到りしならむとは。倭東は武蘭及び武隼と呼べる二名を從がへて此處に來りつ、暗中を摸り索めしが、沙上に昏絶して仆れをりし、福倍及び排克の二名に摸り着りて、之を介抱して、復活せし

めたる後、渠等の間に左の如き問答起りぬ。是時風濤の聲は依然耳を聾するばかりなりしが、渠等は恰かも圭兒の頭上にありて、高く相語れば、其の聲猶ほ明かに耳に到りぬ。

福倍の聲として「此處は何國なるや」。倭東「余等は未だ之を知らず、然れども余等は兎に角に東方に、人有るかたを尋ねゆかざるべからず」。排克「して、余等の武器は」。倭東は船中のかくし抽斗を抽きて、其の内より五個の銃と若干の硝包とを取り出だしつゝ、「即ち此處にあり、幸ひにして海水にも濡らされず」。「伊範は如何になれる」。「余等の後邊に、祿屈及び胡布の二人之を看守しをれり、伊範は其の欲すると否とに論無く、必ず余等の行く所に偕に行かざるべからず」。福倍「圭兒は如何になれる、無事に此處に上陸せるか」。倭東「圭兒、オヽ、余等は復たかの婦人を懼るゝを須ひず、余は船の此處に打ちあげらるゝをり、渠の浪に拂はれて海中に陷りしを、遠くより望み見たり、渠は已でに久しく海中の最深處に眠りをるならむ」。排克「そも亦た好し、そも亦た好し、渠はあまり多く余等の事を知りをれば」。倭東「縦ひ渠をして海底に沒さゞらしめしとするも、

余等は長く渠をして余等の秘密を知らしめては、置かざりしならむ」。然らば倭東が圭兒に對して、かねて懷きし所の最後の所置は知るべきのみ。

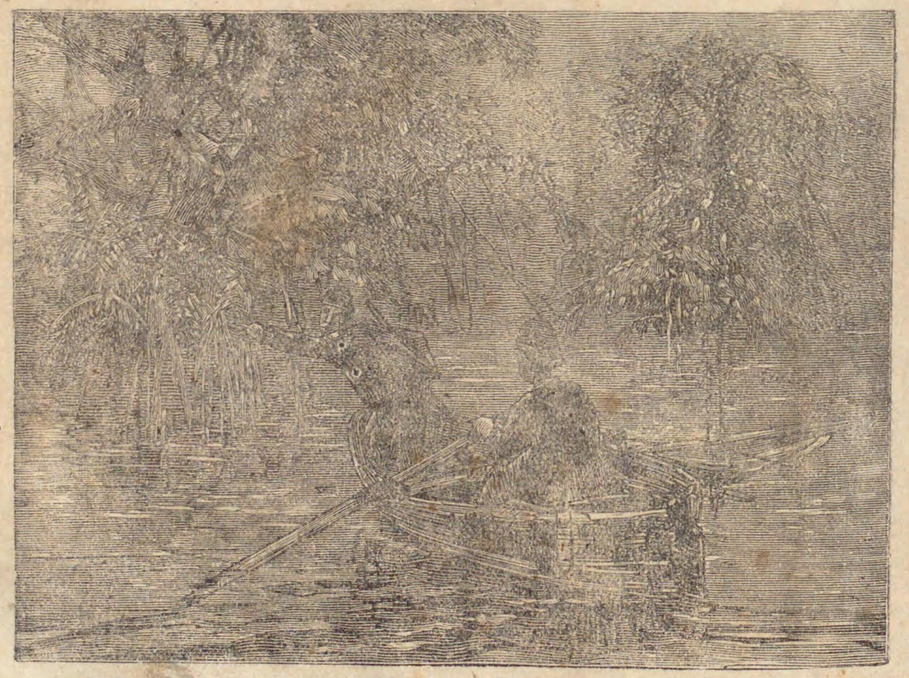
かくて渠等は武器彈藥と、是時まで猶ほのこし貯へたる少許の食物、即ち五六磅の鹽づけの肉二三壜のジン及び僅々の煙草等を船中より取り出だして、之を分ち携へつ、、福倍及び排克を扶けひきて、勢ひ尙ほ猖獗せるあらしを衝きつゝ東方にたどり行きぬ。圭兒は渠等の足音の漸やく聞えずなるや否や、直ちに身を起して、暗中を探り索めつゝ、今ま渠等が進み行ける反對のかたを指して進み行きぬ。蓋し是時進潮は漸やく既に圭兒の偃臥せる所に及びて更らに幾分間を遲々せば、渠は復び海水に引き去らるべければなり。此の如くして、渠は自然陷穽林に入りて、家族湖の南端のかたにたどり來りしなり、渠が此處に來り到りしは、昨日の午後なりき、然れども途中僅々の野生の果實を拾ひて、たゝべたるより外、何等の食物をも口にせざる渠は、疲れ甚だしきがうへに、又た飢極まりて、再び一歩を移す能はず、終に樹下に横臥したるまゝ、今日に至れるに乃ち幸ひにしてフハンに發見され、武安等の救ふ所となりしなり。

圭兒の物語を聞きたる童子等の驚愕危懼は、想像するに餘りあり。一個の捕虜を伴ひたる七個の兇暴無慚の浮浪人、今ま現に本島に上陸して、彷徨徘徊すといふ。渠等は人を殺すを、草を斬るよりも容易におもふ者なり。若し一たび佛人洞の所在を知らば、必ず之を奪領して、衆童子を奴隷にし、或は虐屠せざれは、肯て已まじ。武安が第一に憂ひしは杜番等四童子の身の上なり、渠等は必ず未だ、倭東等の此處に上陸せしを知らざるべく、或は一發の銃聲一縷の煙影、渠等の所在を倭東等に發見せしめなば、渠等は直ちに惡人等の手に落ちて、如何なる患苦を受けむも料られず。故に渠は此より直ちに、自から杜番等の處に往いて、方さに其の頭上に懸れる危難を告げ知らせて、之を洞に伴ひ還るべしといふ。吳敦「君自身に行かむと欲するか」。「然り」。「如何にして」。「莫科と俱に短艇に駕して、嚮の日にせし如く、湖を横ぎり川を下りて、杜番等の卜居の處に達すべし」。「何時此處を發足すべき」。「今夕、人影の見えざるやうなるを待ちて」弱克「兄うへ、余も偕に行くべからざるか」。「否な、ボートは六人以上を載す能はず、余等は歸途には四名を俱に載せざるべからず」。

是日は一同洞内に閉ぢこもりて、敢て一歩も戸外に出でず。渠等は更る〳〵、其の此處に漂着して今日に至りたる顚末を、圭兒に語り聞かすに、圭兒は或は驚嘆し、或は嗟賞して、一同の勇氣と忍耐とを讃稱しつ、自今自後己れも亦た熱心忠實なる、一同の躬方たらむをを誓ひたり。左吡は圭兒の此處に、一同に邂逅せし日の恰かも金曜日なりしに因り、魯敏孫の昔しに倣ひ、圭兒を喚でフライデーとなさむをを發議して、一同の喝采賛成を博し得たり。

午後八時に至りて、ボート解纜の準備既に了りしかば、武安と莫科とは、各一個の連發短銃と一口の腰刀とを佩びて、一同に別を告げて、悄々地にコウジランド川より、湖に乗り出だせり。幸ひにして風順なりしかば、ボートは箭の如く飛び行きて、二時間足らずに六マイルを横ぎり了り、嚮の日初めて此處に來りしとき到着したりし、同じ小丘のほとりに到着せり。此處より亦た嚮の日の如く、湖岸に沿ひて東方川の口まで北上するに、是時風は全く死て、復た帆の力を籍るを能はざるにゞ、渠等は櫂を鼓しつゝ、徐々として進み行くに、岸上寂然として一鳥の啼くをだも聞かず、亦た一線の火光のやみを破ぶりて揚がるをだも望まず。既にして十時半に至りてボートは川に入りたるにゞ、武安は莫科の獨り棹を操るに任せて、ボートの艫に坐を占めつ、靜かに流を下りゆくに、行くを未だ幾丁ならず、舳頭に立ちたる莫科の、突然來りて手を執るに驚きつゝ、其の指さすかたを視れば、右岸の上、川を距るを三五十間の那方に、半ば熠にかゝりし火の光樹間を穿ちて、うす赤く影を曳くを見る。

是れ何人の露營なるべき、倭東等の夥伴なるか、將た杜番等の一行



なるか。武安「莫科、兎に角に舟を岸につけ」。「余も主公と偕に上陸すべからざるか」。「否な、余が單身にて行かむかた、更らに容易に那方に覺られざる便宜あるべし」。櫂を皷するを五七回するほどに、ボートは早くも岸に着きぬ。武安は、莫科を舟中に留めおきて、獨り岸に跳りあがり、腰刀を拔きて之を右手に提げ、左手には短銃を握り持ちて、徐々として、火光のかたに恐び近づきたり。忽ちにして渠は前方の灌木叢の裡に、一團の大なる黑影ありて、蠢々として動めくを見たりしが、黑影は突然一聲叫ぶとひとしく、身を躍らして前方に飛びかゝれり。是れ一個のジャグワー（亞米利加虎）なりき、同時に俄かに人の聲ありて「助けて、助けて」。

武安は直ちに、是れ杜番の聲なるを認めぬ。蓋し他の三童子が露營の中に眠れる間、杜番は火光の前に見張りしてをり、疲倦の餘り、覺にず假睡せしやう思ふうち、不意に斯の猛獸に襲ひ擊たれて、仰ふけに地上にはね倒され、武器を執るにも暇あらず、空しく赤手を揮ひて以て、之と搭鬪しつゝありしなり。韋格は第一に、杜番の聲に驚き覺めて、其の銃を取りもあへず、杜番のはとりに

走せ到りて、早くも銃を擧げて之を發たんとす。說く時遲し、同時に此處に走せ到りし武安は、此方より之を止めて「銃を發つ勿れ、銃を發つ勿れ」、韋格は再び驚て、何人なるやと、すかし視る間に、武安は早くもそこに跳り出でゝ、虎の背後より擊ちかゝるにゞ、虎は忽ち杜番を捨てゝ、ふり向きさまに武安に飛びかゝる。此の間に杜番はやう〳〵身を起して、武安のかたを視れば、武安は是時飛びかゝり來る虎を、身をかはしてやり違ひさまに、一刀したゝかに面上を斫りつけて、既に地上に擊ち殪してをり。杜番韋格は、是時恰かも走せ到れる乙部虞路とゝもに、武安のかたに走せより視るに、武安は虎のために搔かれたりと見ゐて、左の肩頭より鮮血滾々流れをり。韋格「君は如何にして、今ごろ此處には來あはせしぞ」。武安「その故は慢々相語るべし、兎に角に先づ余と偕に此方に來れ、直ちに、直ちに」。杜番は武安の肩頭より流れ出づる淋漓たる鮮血の痕を熟視しつゝ、自から感激に禁えざるが如き音調にて、「然れども余は先づ君に深く君の高義を謝さずしては、君に隨ひゆく能はず、君は實に余の命を救ひたり」。武安「勿れ杜番、君をして余の地に在らしめば亦た必ず此の如

くしたるならむ、再びそを言ふ勿れ、只だ余と偕に此方に來れ」。武安の負傷は、甚だ憂ふべきものには非ざりしと雖も、之を裹みて、出血を止むるを必要なれば、韋格は自から手巾を取り出だして、之を絡ひなどするうち、武安は詞短く四人に事の要領を告げ知らせぬ。即ち杜番等が海水に引き去られしと思ひたるセベルン號の船員は、無事に生存して、其の夥伴と倶に現に斯の島にあり、渠等は皆な兇暴無慚の惡人にして、人を殺すを草を斬る如く、僅かに渠等の手を脱がれたる一婦人、偶ま佛人洞に來りて、親しく渠等の素性を告げ知らせしによりて、武安等は始めて其の頭上に懸りたる一大危難あるを覺れり。渠等目下の第一良策は、一同一處に集合して、心を協せ力を戮せ、以て斯の共同の敵を防ぐより善きは莫し、武安が四人を來り迎へしは是がためなり、嚮に韋格が發銃せむと欲せしを止めしは、或は倭東等が銃聲を聞きて、渠等の此處に在るを覺らむを、虞れたればなり。

杜番は之を聞き訖りて、武安の限りなき親切に、さすが平生の倨傲も消ゆうせて、「ア、武安、君は實に余に百段優りたる高上の人なり。」武安「否な杜番、否

な親友、余は幸ひにして今日此の如く君の手を執るを得たり、余は君が余と偕に佛人洞に還るをを承諾するまでは、肯て斯の手を放たざるべし」。杜番「諾、武安、敬みて君の好意を承く、自今自後、余は君が第一の服從者たるべし、余等は明早朝直ちに此處を發足すべし」。「否な、余等は今夜直ちに洞に歸らざるべからず、明日とならば又た人に見らるゝの恐れあり」。「今夜直に、然れどもそは如何にして」。「即ち水路に由りて以て、斯の岸の下に莫科ボートを繫ぎて余等を待つゝあり、余は莫科と偕に欺騙灣まで往かむと欲して、方さに川を下りかゝりし途中、君等の露營の火光を見て、乃ち上陸したりしなり」。「而して恰かも余の九死を救ひたり」と杜番は獨語せり。

杜番等四童子が此處に露宿しをりたる故は、一言以て之を悉くすべし。四童子は昨十六日の夜巨熊岩の下に歸り着き、今朝巨熊岩を發足して、薄暮この湖畔に達し、明日は未明に此處を打ち立ちて、佛人洞に歸りゆかむと欲しをりしなり。

一同直ちにボートに乘り移りて、此處を發せしが、幸ひにして風復た順なりし

かば、途中何等の異なりたる事もなく、曉四時にニウジランド川の口に歸り着ぬ。吳敦等衆童子が、四人の再び佛人洞に還りて、一同と共に居るをとなれるを聞きしとき、之を喝采歡迎せる欣喜の狀は、必ずしも贅せず。

第十二回

洞中の情況　○洞外の形勢　○人心洶々　○圭兒の發案　○武安の沈吟　○新式の空中飛行機　○夜中の試驗　○弱克の懺悔　○漂流の原因　○空中旅行　○遠近二種の火光　○紙鳶の線斷れたり

十五少年再び佛人洞に團聚せり、渠等は此より、初めに倍したる和協をもて、相交はり親しみたり。若し杜番の心中には、已れが一たび志せる所を貫く能はずして、阿容〳〵此處に歸り來りたるをに自からも快からず、尙は多少の遺憾をぼ抱きたるやも知るべからず。然れども渠は絕えて其の不快を面に顯はしたることなし、蓋し數日の間の分離と飄泊とは、渠をして痛く懲る所あらしめ、其の湖畔林中に彷徨せる間に於て、窃かに自から己れが剛愎偏執の愚かなりしを悔いたる者も、啻に一再にあらざりき。唯だ渠が一點の我慢心は、渠をして

其の戇意を他の三名に、打ちあくるをを得なさゞらしめしと雖も、渠は實に自から其の愚かを悔いしなり。他の三名に至りては、杜番の如く甚しく剛愎偏執ならざるだけ、其の懲悔の念も亦た深きを一層なりしなり。故に今次歸來の後は、杜番及び三名が武安に對するの感情は、全然一變して、皆な別人の如くなりたり。加るに、現時一同の頭上に懸れる非常の危難は、一同の和協をして、更らに一層の鞏固なるものとならしめたり。抑も倭東等一夥の惡漢は、成るべく早く斯の島を去りて、大陸に還らむをを冀がはむは、言ふまでもなし。然れども若し渠等にして、佛人洞の童子等が、此の如く多くの調度器械を儲へて此處に在るをを知らば、豈之を奪領して、以て自から使用せむをを欲せざらむや。況や其の調度器械を守る所の者は皆な未丁年の童子若くは幼兒にして、之を襲撃し奪領するを、極めて容易なるに於てをや。童子等は非常の用心を加へて以て、渠等に洞の在る所を覺られざるやう務めざるべからず。一同は杜番等をとり圍て、其のセベルン海岸より巨熊岩に返る途中、何等か倭東等の踪跡を發見せざりしや否やを問へり。セベルン海岸とは杜番等が始めてセベルン號の傳馬船

を見し一帶の濱邊に、童子等が假に命けし所の名なり。杜番「否な、余輩は何等の踪跡をも發見せざりき。」吳敦「然れども倭東等がたしかに、東方に向て進み行きたりとは圭兒の親しく睹たる所なり」。杜番「想ふに渠等は只管濱邊に沿ひて進み行しものならむ、今輩は山毛欅林のかたに由りて歸りたり、故に相逢はざりしなるべし」。吳敦と武安とは更らに言を改めて圭兒に向ひ、斯の島の方位に就て何等か知る所あらざるやを問ふに、セベルン號燒亡の後、伊範は常に傳馬船を、南亞米利加の海岸に向けて行りたるはづなれば、斯の島は兎に角に南米大陸を距るを遠からざる處にある者なるべき歟。然れども此より以上の事は、聞き知らずといふ。

兎角するうちに、十月の月も既に暮るゝに垂んとせるが、倭東等の姿は曾て見ゆず、渠等は既に其の船を修覆して、斯の島を立ち去りし歟。圭兒の記憶する所に由れば、渠等は一個の斧を有する外、亦た各自隨身の懷中小刀あり、或は是等を用ひて以て、不十分ながらに其の船の大破處を假に繕ひて、既に島を去りしにあらざる歟。然れども童子等は確かに其の消息を知りたる後に非れば、

輕々しく其の形を洞外に見すべきにあらず、故に渠等は、一日武安と杜番とが、岩壁の上に樹ておきたる信號旗を取り下ろし、其の竿を倒して以て、一同の蹤迹を掩はむと欲して、敢て潛かにスロウ灣に往返したりしを除く外、皆な常に洞內に蟄居してをり、銃聲の倭東等に、諸童子の此處に在るを覺らしめむを恐れて、一切之れを禁じたれば、杜番等の銃獵者は、毎日手を束ねて其の無聊を嘆ずるのみ、唯だ幸に陷穽係蹄の、毎日多少の獲ものを齎らす有れば、庖厨に不足を愬ふるには至らず、且つ昨年來渠等の設立保護せる養禽場は、次第に繁盛に赴きて、其の管理者左吡雅涅の二人よりは、其の幾分を宰して以て其の人口を減殺するにあらずば、既に塲の狹隘に堪えざるよし、訴へ出でたるほどなり。此の外茶の木砂糖の木は、皆な洞外咫尺の間に多く有りて、常に其の供給を絶たず。故に童子等は久しく洞內に蟄居するも、未だ曾て少許の不便を感ぜざりき。

加るに、此ころ又た、爲めに童子等の生活に一大便宜を添へし所の一新發明ありき、十月二十五日の午後、圭兒は沼澤林のほとりに於て、高さ五六十尺の喬

木の、其の葉の狀月桂樹に似たるが、數株聳立するを認て、「こは珍らし、此處に牝牛の木有り」婦人に伴ひたる土耳胡太は齊しく絶倒して、「牝牛の木とは」。「恐らく牝牛が之が食むを以てならむ」。圭兒「否な、否な、小主公、之を牝牛の木と名くる所以は、斯の木は牝牛の如く、乳汁を噴き出だせばなり、其の味の美きをは、目下御身等が用る所のヴイクンヤの乳汁より勝れり」。圭兒は洞に歸りて其の發見の事を語れるにぞ、吳敦は直ちに左吡を喚びて、偕に圭兒に隨ひゆき視るに、圭兒の語れる所にたがはず、童子等は是まで心つかざりしが、是れ疑ひもなき牝牛の木なり、斯の木は一たび其の皮を截れば、其の截痕より多量の白色の液を噴出す、其の味及び滋養分、共にミルクに異ならず、且つ之を凝結せしむれば、一種良好のチースを得べく、亦た一種純粹の蠟を得て、以て上等の蠟燭を作るを得べし。

既にして十一月となりたるが、依然倭東等の姿は見にず、武安杜番等諸童子は、愈よ確かに惡漢等は既に島を去りしならむと信ずるに至りしが、縱ひ果して既に島を去りたりとせしむるも、童子等は其の證を見たる後に非れば、漫りに心

を安じて、洞外を逍遙すべきにあらず、武安は幾たびか、自から湖の東岸に往て其の消息を偵察せむと欲し、馬克太杜番韋格等は、皆な喜で其の行に偕なはむとを願ひしが、萬に一つも惡漢等の仍ほ島に留まりをりて、諸童子等の之と邂逅せむには、其の危險言はむもさらなり、則ち無謀これより甚しきは莫し。故に武安は之をいひ出だす毎に、吳敦の遠慮有る反對說に抑へられて、遂に其の志の如くするを得ず、一夕武安は復た斯の議を提出して、吳敦と其の可否を論ぜるをり、旁らに在りて之を聞ける圭兒は、兩人の詞終れるとき、「主公武安、御身は明日一日、吾身に暇を賜はらずや」。武安は驚きて「汝は何處に往かむと欲するや」圭兒「御身等は復た久しく此の如く不安掛念の中に日を送る能はざるべし、吾身は嚮に漂着せる北方の濱邊に往て、傳馬船の仍ほ彼處に在るや否やを窺ひ視るべし、若し仍ほ在らば、倭東等の未だ島を去らざるの證なり、若し否ずば、是れ既に島を去りしの證にして、御身等は復た此の如く洶々たるを須ひざるべし」杜番「そは頃來武安と余とが屢ば發議して、而かも敢て決行せざる所ならずや」。圭兒「然り、然れども御身等は未だ倭東等に其の人有るを知し

られざるの人なり、吾身は然らず、吾身は渠等の舊侶伴なり、縱ひ渠等に撞着するも、御身等の如く危險ならず」。吳敦「然ども汝若し再び渠等の手中に落ば」。圭兒「最も凶くしてからが、初めの境界に復へるに過ぎず」。武安「然れども渠等は若し再び汝を獲ば、十中八九復た汝を生かしおくまじ」。圭兒「吾身は既に一たび渠等の毒手を逃れたり、豈再び逃れ得ざるの理有らむや、且つ若し伊範を誘ひて、共に此處に逃れ歸るを得ば又た御身等のために倔强の躬方を得べし」。杜番は首を傾けて「若し伊範をして一毫だも逃走の隙あらしめば、渠は夙に逃れ走りしならむ」。吳敦「杜番の說是なり、伊範は倭東等の惡事を詳知せり、倭東等が一たび安全の地に

着して復た伊範の力を要さゞるに至らば直ちに之を除きて、他日の禍根を絕たむと欲すべきは、伊範も亦た自から知らざらむや、渠の今日まで逃走せざるは、其の隙を得ざれはなり」。杜番「或は既に之を試みて、惡漢等のために追ひ捕はれ、其の毒手に斃れたるやも料られず、果して然らば」汝と雖も若し渠等に再び捕れなば、圭兒は之を遮りて「吾身は己れの氣息あらむ限りは、渠等の虜とはならざるべし」。武安「勿論肯て虜とならじ、然れども余輩は汝の然る危險を冒すを許すを能はず、請ふ余輩をして何等か他に、渠等の消息を探るの道を求めしめよ」。

若し童子等をして夜中極めて高き處に登りて、四方を展望するをだに得せしめば、倭東等若し仍ほ島に在らば必ず火を燃すべきを以て、其の在否を知るを得べく、若し在りとせば、併せて其の在る所の方位をも知るを得べきなり。不幸にして島に高山無くアウクランド岡の頂きよりは、湖の東岸さへ視るを能はず、況や欺騙灣の濱邊巨熊岩の左右をや。

一日武安の心頭に、ふと浮びたる一計あり、初めは自らも、其あまりに奇を好むに似たるを思ひて、之を斥けしが、反覆して之を思ふにつれて、終には此を舍てゝ殆ど他に良計無しと思ひこむまでに至れり、讀者は猶ほ記憶するならむ主兒が初めて此處に來りし日童子等は將さに何事をなさんとしつゝありしかを。當時童子等が試揚せむと欲して中止したりし紙鳶は、尙ほ藏して佛人洞に在り、武安は嘗て英國の新聞に於て、前世紀の末に一婦人が、紙鳶に駕して空中に飛揚するをを試みて、成功したりし事を記せしを、見しをを記憶せり。即ち斯の婦人の爲に倣ひて、かの紙鳶を利用して、空中に騰りて以て、全島の模樣をば俯瞰せむと欲せしなり。讀者は或は武安の設計のあまりに大膽にして、且つ滑

稽に近きを嘲けるならむ歟。然れども渠は沈潛反覆して、之を思ひ復た思ひし後、是れ決して行ふ可らざるの事に非ず、又た初めに想像せるが如く甚だ危險なるものに非ずと、堅く信ずるに至りたり。十一月四日の夜、渠は晩餐を訖りて後、一同に向つて詞短く其の思ふ所を語りて、以て諸童子等の可否を求めたり、諸童子は聞き訖りて、暫し詞なかりしが、頃ありて杜番は「然れども、かの紙鳶の大さにて、能く余等の中の何人かを、擡擧するだけの力量あるべき歟」。武安「定めて力量不足なるべし、必ず更らに大なる、亦た更らに堅固なるものに、改造せざるべからざらむ」。韋格「紙鳶は一たび飛揚するときは、常に其の飛揚力を保持しをるを能ふべきか」。馬克太「そは必ず能ふべし」。武安は英國の婦人の例を援きて、之を說くを一遍して、且ついはく「要は唯だ紙鳶の大小と、風力の强弱如何に由るのみ」。馬克太「君は幾何の高さにまで、之を昇さむと欲するや」武安「若し六七百尺の高さに達せば、全島の模樣を俯瞰するを得む歟」。左吡「請ふ速かに之を試みよ、余は既に屏居の苦に厭き〳〵せり」。吳敦は始終默然として敢て一言をも發せざりしが、諸童子の既に散じて、唯だ武安と已れ

との二人のみとなりしとき、武安の面を瞻りつゝ「君は眞に斯の計を試行せむと欲するか」。「然り、吳敦」。「是れ極めて危險の事なるを知れるか」。「然り、然れども定めて君の想像する如く、甚だ危險なるものには非じ」。「而して自から一命を擲賭して、斯の危險を極めたる試驗に當る者は、余輩の中何人なるべきや」。「若し、此の事即ち已れの義務なり、と定まらば、吳敦、君と雖も敢て之を辭まざるべし」。「然らば君は闔を拈りて、其の人を定めむと欲するか」。「否な、其の人は自から已れの心より之に當らむをを願ふ者に非ざれば不可なり」。「然らば、君の胸中には既に略ぼ其の人を豫算せるか」。「或は然らむ」、と答へつゝ、武安は意味ありげに吳敦の手を握りしめぬ。

翌日即ち十一月五日より、武安馬克太等諸童子は、直ちに紙鳶の改造に着手せり。若し渠等をして十分の工學的知識あらしめば、先づ其の瓊擧すべき重量、鳶紙の面積、重力の中心、及び之に耐ふべき線の太さなど、精算比較して後始めて其の改造の設計を定むべきなるが、渠等は不幸にして然までの十分の知識を具へざれば、唯だ從來の紙鳶の飛揚力を試驗して、更らに之を擴張して略ぼ

百三十磅即ち十五貫八百匁の重量を載せて飛揚するに堪ふるほどの、大さのものと爲すに過ず、百三十磅は即ち童子等の中の最重者の量なり。兎角して七日の午時には直徑二間半、毎邊の長さ四尺、面積凡そ六十方ヤードの、八角形の大紙鳶出來あがりぬ。紙鳶改造の間も、童子等は更る〳〵番を定めて、岩壁の上に見張りしたりしが、曾て何等の怪しき事もあらず、湖畔林中看わたす限り寂寥として、曾て一縷の煙を見、一發の銃聲を聞かず、一同は益す惡漢等の既に島を去りしならんと確信せり。

紙鳶飛揚の試驗は、直ちに今夜を以て行はれ、其の危險無きに定まらば、童子等の一人は明夜直ちに之に駕して、空中に騰るべしと議決されぬ。紙鳶にはかねて一個の巨籃兒を約しありて、騰空者は即ち此の裡に安坐すべかりしなり。籃兒はスロウ號の甲板に常用されし者の一個にして、恰かも一個の童子を坐せしむるの大さあり、且つ其の深さも坐せる童子の乳を沒するほどなれば、其の左搖右擺のために、童子が籃外にまろび出づるの憂ひ少し、又た籃兒の緣邊に別に一條の絲を結ひつけあり絲の下端は地上なる一人の手の裡に置き絲には一

個の鐵環を穿す、籃中の人若し降らむと欲するときは、其の鐵環を放てば、鐵環は絲をつたはりて、地上の人の手裡に來りて、籃中の人の意を通知す。

この夜は南西の風吹きしきりて、紙鳶を飛揚するに恰好なりしがうへ、月は午前二時に至らざれば地上に出でざるべく、星さへ甚だ稀れなれば、紙鳶は何ほどの高さまで飛揚するも、人に望み見らるゝの懼れある無し。九時に及ぶ比ほひ、童子等は悄々地に洞外湖畔の廣場に聚まりて、此處に絞車盤をすゑ、之にスロウ號が船の速力を測量するに用ひたる測量索を卷きて、是を紙鳶の線となす。紙鳶に吊下げたる籃兒の内には、土を裝りたる袋の、重さ百三十磅あるを置き、又た其の緣邊に鐵環を貫きたる絲を結ひつくるを、恰かも人の乘るときに同くす。杜番馬克太韋格乙部の四名は、絞車盤を距るを五十間許那方に仰臥せる紙鳶のほとりに在り、絞車盤の周邊には、武安吳敦左毗虞路雅涅ありて、線の伸縮を掌どる。「注意」といへる號令は、武安の口より發せり。「善し」といへる答聲は、杜番の唇邊より揚りたり。「ソレ」といふかけ聲と共に、直徑二間半の大紙鳶は、徐々として空中に升りはじめたり、伊播孫善均土耳胡太等の幼

年者は、平素の戒め愼みをも打ち忘れて、覺にず一齊に喝采讚呼せり。

未だ幾ばくならずして、紙鳶は早くも密雲の中に隱れて、形全く見えずなりぬ。然れども其の線を挽く力の益す强くして、且つ間斷張弛なきは、上方の風勢甚だ盛にして、且つ紙鳶の傾斜せず掉頭らず、常に其の平衡を保ちをるを推すべし。既にして、測量索は伸びて一千二百尺に至りたり、料るに紙鳶は已でに地面を拔くこと七八百尺の高さに達せしなるべし。試驗の成績は已でに十分なれば、一同は絞車盤を逆轉して、紙鳶を下ろしはじめたるが、當初之を升すときは、僅かに十分間許を費やせしに過ぎざるに、之を下ろすには、一時間以上の勞力を須ひて、始めて地上に至らしむを得たり。風勢依然として盛なれば、其の降りて地上に着くときも、何等の撞觸をも感ずるをなく徐々として當初仰臥せし處と殆ど同じ處に無事降り着きぬ。幼年者は覺にずも復た一齊に喝采讚呼の聲を發して、之を祝したり。

試驗已でに畢りたれば、一同は洞に歸り去らむと欲して、武安よりの號令を待てるに、武安は別に何事か深く思ふ所あるが如く、沈吟して肯て一言をも發せ

ず。吳敦は武安のほとりに進みて、其の手を執りつ、「夜已でに闌けたり、請ふ家に歸らむ。」武安「暫らく、吳敦、杜番、余は君等に謀らむと欲する一事あり」。杜番「請ふ語れ」。武安「余等の試驗は意外に十分の好成績を得たり、是れ一に風勢の強からず弱からず、且つ常に一定の力をもて、一定の方向に吹くに由りてなり、然れども此の如き好際會は、屢ば有り難し、明夜果して必ず今夜に同じき天候と風勢とを得るを能ふべきや、否や、尤も覺束なし、故に余は寧ろ今夜此れより直ちに、かねて計りし所を決行せむを、得策ならむと思ふなり、如何」。

武安の說は實に理有りき、然れども何人も敢て進みて、第一に口を開かむと欲する者ある無し。曰く紙鳶に駕して空中に騰ると。是れ言ふに甚だ安くして、行ふに極めて危ふき者なり。童子等固より勇氣なりと雖も、將さに之を決行せむとするに及びては、自然躊躇の意無き能はず、是れさすがに人の情なればなり。然れども武安が更らに其の語を續ぎて、「何人か籃兒に乘るべきや」といふに及びては、言未だ訖らざるに、忽ち衆中に答聲あり「余往かむ」。是れ武安の

弟弱克なりき。「否な、否な、余往かむ、余往かむ」と叫ぶ聲、杜番韋格虞路馬克太左毗等諸童子の口より殆ど一聲に續き起れり。武安は暫し默然として敢て兎角の詞を發せず、弱克は再び聲を高くして、「兄うへ、請ふ余をして往かしめよ、余こそ當さに第一に籃兒に乘るべき人にあらずや」。杜番「何故に、弱克君に限りて、第一に往かざるべからざる理由あるか、何故に余等は君に後れざるべからざるか」。馬克太「然り、然り、何故に」弱克「余は諸君に負へる義務ある故」。吳敦「余等に負へる義務ありとや」。弱克「然り、義務ある故」。吳敦は弱克が常に異なれる詞のさまを見て、其の何の謂れなるやを問はむと欲して、武安の手を執るに、武安は全身わな〳〵と打ち顫ひてをり、是時若し闇中ならずして、十分武安の面を視るをを得せしめむには、吳敦は必ず其の顏色まつ蒼になり、其の兩眼には涙を湛えしを見たるならむ。弱克は十歲の童子には似わはしからぬ斷然たる決意の聲もて、「然らずや、兄うへ」。杜番「余に語り聞かせよ武安、君の弟は余等のために、其の一命を擲賭すべき義務ありといふ、是れ余等が均しく相互に負ふ所の義務にあらずや、何が故に獨り弱克のみ特に其の

義務ありといふか」。弱克「ア、杜番、余之を君に語らむ」。武安は其の弟の詞を遮ぎり止めむと欲して、「弱克、こや弱克」。

弱克は心迫まりて打ちふるふ聲をはり揚げて、「否な、兄うへ、否な、余をして一切を懺悔せしめよ、余は復た久しく斯の痛苦を耐ふる能はず、杜番、吳敦、諸君、諸君が家を離れ父母に離れ、此處に漂流患苦するは、皆な余が一人の愚かより起りたり、スロウ號の海に流れ出でたるは、余が何等の考へもなく、否な單に戯れに諸君を驚かさむと欲する考へより、其の纜を解きしに由りてなり、余は船の次第〳〵に海に流れ出づるを見て、驚き慌てゝ、之を止めむと欲せしが、既に遲かりき、オ、諸君、余の罪を饒したまへ、余の罪を饒したまへ」。言ひ訖りて弱克は、圭兒が親切に百方慰諭するにも拘はらず、胸も裂くるかと想ふばかりに、聲を放て號泣せり。武安「善し、弱克、汝は汝の罪を懺悔せり、因て其の罪の萬一を償ふために、今ま其の身を擲賭せむと欲すと謂ふ乎」。杜番は其の天生の惻隱寛恕の心、自然此の間に發し動きて、第一に叫び出だせり「而して、渠は既に己でに其の過ちを償はざりし乎、渠は既に已でに再び三たび其

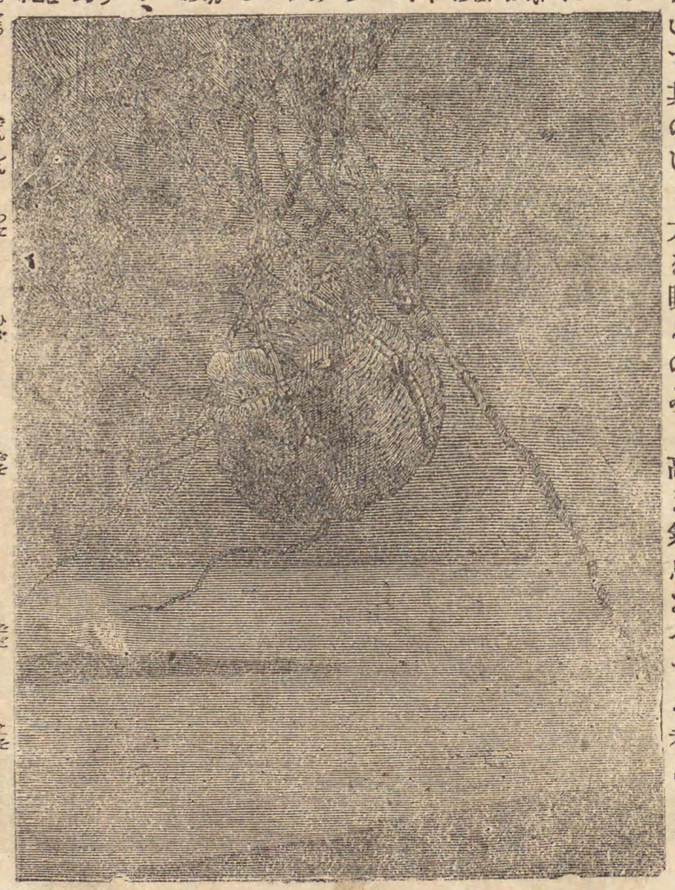
の一命を擲賭して、余等のために危險を冒さゞりし乎、ア、武安、余は今にして始めて、君が平生危難有る毎に先づ君の弟を擇びて、其の危難に當らしめ、君の弟が亦た常に其の身を捐てゝ以て、余等の用を爲さむと欲する所以を知れり、余は今にして、余と虞路とが重霧の中に迷ひしをり、渠が其身を拋て、余等を索めし所以を知れり、ア、吾が親友弱克、余輩は喜で君の過ちを饒すべし、君は既に己でに自から其の過ちを償ひたり、君は復一毫も余輩に負ふ所なし」杜番はじめ一同は、弱克の周圍に聚まりて、各其の手をさし伸べて、弱克の手を握らむと欲せるが、弱克は仍ほ双手に其の面を掩ひて號泣しつゝあり。既にして渠はやう〳〵に涙を歛めて、「見よ諸君、余こそ即ち第一に斯の籃兒に乗るべき人にあらずや、余の言誤れる乎、兄うへ」。武安は緊々其の弟を抱擁して、「善く言ひたり。弱克、善く言ひたり」。

杜番等諸童子は二人を制し止めむと欲したるが、功無りき、是時風勢は次第に吹き加はらむと欲する模樣あり。弱克は一同に握手したる後、早くも土の袋を取り出だしつ、自から籃兒の内に身を置かむと欲して、兄のかたに打ち向ひ、

「兄うへ、余をして一たび汝に接吻せしめよ」。武安「唯々、來りて余に接吻せよ、或は寧ろ、余をして汝に接吻せしめよ、何となれば、その籃兒に乘る者は即ち余なればなり。弱克は驚き叫びて、「兄うへ、汝が」。杜番左吡も亦た同聲に「武安、君が」。「然り余が、抑も弱克の罪を償ふに弱克の身を以てするも、或は其の兄の身を以てするも、何の異なる所かある、且つ余が此の如き危險の計を立つるに、他人をして其の危險を冒さしめむと欲して之を立つべき歟」。弱克「否な、否な、兄うへ、請ふ余をして」。「否な、弱克」。杜番「然らば余は亦た余の番として、敢て斯の任に充てられむをを請求せざるを得ず」武安は斷乎として枉ぐべからざる決意の聲もて「否な杜番、余の意は已でに久しく決せり」。吳敦は緊々武安の手を握りしめつゝ「武安余は初めより、君の意の應さに然かならむを思へり」。

武安は直ちに籃中に坐を占めぬ、雅涅は籃邊より垂下せる合圖の絲を持ちてをり、馬克太韋格鳳路左吡は、徐々として絞車盤の線を伸ばしはじめぬ、未だ幾ばくならずして、紙鳶は武安を吊りたるまゝ、早くも形見にずなりぬ。一同は

只だ默然仰いで其のゆく方を瞻るのみ、高き氣息さへする者あらず。幸ひにして紙鳶は前に同じく、傾斜せず掉頭らず、冉々として昇りゆけば、武安は甚だしく危險を感ずるをなく、籃兒の四方を吊れる繩を、左右の手に握ぎり持ちて、紙鳶のゆくがまに〳〵升りゆけるが、其の空氣を切るにつれて、籃兒に感ずる一種の顫動は、全身に傳はり響きて、恐ろしきが如く、擽ばゆきが如く、異



様名狀すべからざるの感有り、十分間許りを過ぐるほどに、忽ち物に當れる如き響きありて、籃兒の少しく撞觸を感ぜしは、線の既に伸び畢りて、紙鳶の騰上方さに止みしを推すべし、武安は隻手に繩を握り持ちて、隻手に望遠鏡を取りあげて、やをら四方を俯瞰するに、湖水や、茂林や、岩壁や、渾べて冥々たる黑暗の中に沒して、一物の眼に入る者ある無し。唯だ彷彿として、僅かに其の色を辨ずるは、本島と四邊の海水との差別のみ。北南西の三方は、皆な一樣の雲密に鎖されて、得て一物を視るべからざるも、東方の一角は雲斷に天露はれて、三五の星、粲然闇中にきらめくを見る。忽ち見る東方の一邊に、一帶の赤光あり、低く地上に横はれる雲層を烘りて、其の色明かに望み視るべきを。是れ必ず火光なるべし、然れども其の距離を計るに、遠く幾十マイルの外に在り、或は本島を距る幾十マイルの那方に、一帶の陸ありて、其の地に噴火山なども有り、乃ち斯の火光を放つに非るを得むや。かく思ふと同時に、忽ち心頭に浮ぶは、嚮きに初めて欺騙灣を訪ひしとき、望み見たりし白點のをなり。更らに熟視するに、斯の火光よりは遙かに近く、己れを距る僅かに五六マイルの處

に、又た一道の火光あり、料るに是れ欺騙灣の濱邊、或は濱邊と湖岸との間なる、茂林の中より揚るものなるべし。然らば是れかの倭東等一夥にあらずして、復た誰れの之を燃す有らむや。

武安はかく判定すると共に復た久しく空中に留まるべき必要なければ、直ちに望遠鏡を收めて、合圖の鐵環を落とし下すに、幾秒ならずして、鐵環は雅涅の手に達しつ、地上に武安の消息如何と、片唾を呑で待ち居たる一同は、直ちに絞車盤を逆轉して、紙鳶を挽き下ろしはじめたり。嗚呼一同が地上に在りて、斯の合圖の來るまで待ち居たる二十分間は、如何に長く久しかりしとするぞ。是時風勢は次第に吹き加はりて其の猛烈初めの比にあらざるに、風位さへ亦た吹き變らむとして、紙鳶は屢ば掉頭らむと欲する如く、童子等が挽き下ろす線の一張一弛するにぞ、其の絞車盤を回轉するとのなか〳〵に困難なるは、言ふもさらなり。武安に對する掛念は、又た一層の甚しきもの有り。武安が合圖の鐵環を落とし下してより、既に一時間と四十五分を經たり。紙鳶は猶ほ地面を距る二十間許の上に在るべし。忽ちにして一陣の强風吹き過ぐるとおもふと其

に、絞車盤を把り居たる杜番馬克太韋格虞路左毗乙部の六名は、飜然地上に投げ倒されぬ。蓋し紙鳶の線斷れて紙鳶は武安を載せたるまゝ、黑暗の中に飛び去りしなり。

○十三回

○武安の復命　○胡太の恙　○傳書燕の歸來　○人心の沮喪　○ラマの死体　○戸外の叫聲　○一個の煙管　○無風無雨の大あらし　○伊範の物語　○大苦戰　○濡れくたれし一漢子

衆童子は且つ驚き、且つ怖れつ、異口仝聲に「武安、武安」と叫びたるが、功なかりき。

此の如くすること廿分間許にして、忽ち湖の水際より、「諸君」と呼はる聲起れり。「兄うへ」と叫びつゝ第一に走せ着きたるは、弱克なりき。「倭東等は尙ほ島に在り」とは是れ一同が其のほとりに走せ到れるとき、武安の第一に發したる詞なりき。

蓋し紙鳶の斷線れしとき、武安は其の身の次第に地上に落ちゆくを覺えしが、幸ひに、紙鳶は恰も輕氣球乘りの用ふる所の大傘の用をなして、これを急墜直

下せしめず。兎角するうち、漸やく水面に近づきたれば、乃ち身を跳らして、自から水中に投下して、七十間餘りの距離を、難なく岸に泳ぎ着きしなり。紙鳶は武安の投下すると共に、忽ち再び空中に輕颺して、獨り北東のかたに舞ひゆきぬ。

次の朝は、一同前夜の疲勞に寢すごして、日已でに高く昇りし後、纔かに臥床を起き出でしが、一同直ちに物置の洞に集りて、今後の進退を商議せり。

倭東等の島に留まるを、既に二週間以上に及べり、而して尙ほ此處を去らむとする模樣なきは、蓋し其の船を修復すべき道具を少けるに由りてなり。若し是等の道具さへあらしめば、船は修復を加ふべからざるほど、大破損したるにはあらざればなり。又た渠等は未だ島を去らざれども、然りとて亦た、其の寓居を此處に搆へむと欲するにもあらざるは、其の遍く全島を探檢して、尤も其の栖宅に適ふべき所の地を索めむと圖る模樣もなきを觀て、之を知るべし。是等の事より推究して、武安は昨夜空中より海を隔てゝ望み見たる赤火光のをを語り、必ず斯の島の東方に、甚だ遠からざる處に大陸あり、渠等は之を知れるが

故、永く斯の島に留まるの覺悟をなさゝるならむと判ぜり。若し武安の所判を、して、其の眞を得たるものと爲さしめば、是れ輕々に看過ぐすべからざる一重大問題なり。即ちチエイアマン島は從來一同の信じたりし如き孤島にはあらずして近く其東方に大陸若くは群島を有する所の一無人島なり。然れども是は目下の急先問題に非ず、目下の急先問題は、倭東等七名の惡漢の尙ほ島に在りて東方川の口に宿しをるをなり。渠等は現在の宿處より只だ一轉歩せば、湖畔に出づべく、湖畔を彷徨するうちには、或は偶然斯の洞のほとりにも至るを、ありがちなるべし。故に童子等は前に倍して、渠等に其の姿を見られざるやう、用心戒愼せざるべからず。

童子等は先づ、厩舍及び養禽場を遠ぐる所の柵並に洞の表裡二所の口に、松杉の枝灌木など多く切り掛けて、打ち見たる所、茂林樹叢などの如く見ゐるやうし、已れ等は洞内に深く隱れて、猥りに戸外に出でず。殊に湖畔の廣場には何人も一切出で行くを許さず。此の如くして、一同は惴々として危懼不安の中に日を送れるに、之に加へて、一同をして更らに眉を蹙めしめしは、最幼年

者胡太の此ころより熱を病みて、容体甚だ危篤なるをなり。吳敦はスロウ號に具へありし藥籠を取り出だして、萬一誤投などするをなきやと氣づかひつゝも、止むを得ず己れの知れる所に因りて、藥を進め、他の諸人も勿論各及ぶ限りの力を盡して看護せるが、畢竟一同皆な只だ齡相若きたる童子なれば、手は心の什一を動く能はず。幸ひに圭兒の此處に在りて、宛がら慈母の其の愛子を介抱する如く、行きとゞきて親切周到に、之を看護するあり、やう〳〵、終に快方に向ひはじめぬ。是時若し圭兒の洞内に在るなかりせば、其の結局實に測るべからざる者ありしならむ、此の外斯の婦人が平素、洞内諸童子に對して、慈母的愛情親切を以て、何くれとなく世話したる、冥々の功德は、逐一數ふるに勝ふべからず。

さて、十一月の初旬より中旬にかけては、殆ど連日の陰雨なりしが、十七日より天霽るゝと共に、暖氣俄かに加はりて、茂林は皆な青綠の色を着けて、百花競ひ開き、南澤には多くの羽族歸り來れり。ある日、左吡が洞外附近の地に設けたる羅網に罹りたる鳥類を收むる中、其の頸に小さき函を約したる一個の燕

あるを發見せり。一同且つ驚き且つ喜びつゝ、忙がはしく其の函を卸して、之を開き視るに、何等か他の地方の人より、童子等に送り來れる答書には非ずして、函の内なるは、やはり去秋己れ等が納めおきし遭難報告書なりき。

此ごろは一同多く洞内にたれこめて、戸外に出づるを稀れなれば、馬克太の專任擔當せる日記も殆ど閑却せられて、其の筆に上るべきほどの事もいと少く、一同只だ一室によりこゞりては、無聊を嘆息するのみ。兎角するうちに更らに三箇月餘りを經ば、渠等は復た第三の冬を此處に迎へざるべからず。渠等は漂流の初めより以來の事どもを回想して、徐かに越方行末を思ひめぐらせば、已れ等の斯の島に在るをは、何時を限りに終るべきや、或は到底再び故郷父母を見るの期無くして、己れ等は斯の島の土と化し了るに非ざるべき乎。

是れ吳敦を除くの外、一同の心に次第に結ぼりし所の疑ひにして、皆な鬱々として樂まざるの色あり。武安は一同を諭し勵まして、決して此の如き憂無かるべきよしを、口には主張せるが、心には亦た他の諸童子と同じく、斯の疑ひを抱くを免れず。

是月の二十一日の午後二時ごろなりき、杜番はニウジランド川の樹陰に踞して、魚を釣りゐたるに、湖畔に群れゐし鳥類の、俄かに嘹々相喚びつゝ、東方に翔り去るを見たり。渠等は川の對岸に至りて、其の廣く大きく圈をなせし者の次第に縮小集中して、終に黑く一團を成したるが、仍ほ嘹々高く相喚びつゝ長草灌木の中に沒し了れり。杜番は之を望み見て、是れ必す何等か動物の死体の彼處にあるならむ、と判じたるにゞ、急に洞に走せ歸りて、莫科を呼びて直ちに短

艇を出ださしめ、偖に川を渡りて對岸に登りて、群れ集へる鳥類を逐ひ去りて長草の底を檢するに、一個の小さきラマの屍体ありて、横仆せり。鮮血は仍ほ滾々として、其の横腹の創口より流れ出でつゝあり。且つ其の身体の尚ほ微温を帶ぶるは、其殺されてより未だ多くの時間を經ざるものなるを知るべし。杜番「是れ必ず銃殺されし者なるべし」。莫科「此處に其の證據あり」と答へつゝ、其の小刀もて創口より、一個の鉛丸を抉り出だせり。疑ひもなく是れ倭東等の中の一人の、發ちたる所の者に必せり。二童子は其のラマの死体は、鳥類の貪り啖ふに一任して、忙がはしく洞に走せ歸れり、歸りて之を他の諸童子に告ぐるに、一同亦た今さらの如く驚き怖れつ、さま〳〵に商議せるが、かのラマの其の現在斃れたる處にて銃殺されし者に非ざるは、童子等が常に耳を欹てゝ洞外の動靜に注意せるにも拘はらす、曾て銃聲を聞きし者無きに由りて、明かなるが、亦た其の甚だ遠距離の處にて射られし者に非ざるは、其の創の極めて重くして、ラマが斯の重創を負ひて甚だ遠く走るをは能ふまじきに徵して、明かなり。されば之を總ぶるに、是れ倭東等が東方川を溯りて、次第に洞のかたに

近づきつゝあるをを示す者にして、其の夥中の幾人かは、既に一たび南澤のほとり近くまで湖畔を彷徨し來りたるをを證する者なり。童子等は唯だ益す、用心に用心を加ふべきのみ。

かくて又た三日を經たるに、茲に渠等をして事態の益す切迫せるを覺へて、更らに一層の危懼を增さしめし所の、一新事件現はれたり。二十四日の朝九時ごろ、武安及び吳敦は、ニウジランド川の對岸に於て湖畔より南澤に至る間の細途に、若し能ふべくば、胸壁を築きて、此處に杜番等の善射手を伏して、倭東等の斯の方面より來るを禦がむと欲して、其の地形を視むがため、相携へて對岸に抵り川の畔の茂林の際を進み行けるに、武安は何物か忽ち足に踏みつけしもの有り、然れども、是れ此の邊に無數に散布せる貝介の類なるべしと、思ひたれば顧みもせず、進み行けるが、後に立ちたる吳敦は、足を停めて之を拾ひあげつ「待て、武安」。「何事なるや」。「看よ、是れ陶製の煙管なり、余等の中に煙草を喫する者無ければ、是れ必ず倭東等の徒の遺せし者なるべし」。「或は佛人洞の昔しの主人慕員の遺物ならむ」。「非なり、煙管に附着せる煙草の香猶ほ新たな

るは、僅々一二日前若くは一二時間前、此處に遣されし者なるを示せり」。果して然らば、倭東等の徒は、既に近く佛人洞前面の川の上まで彷徨し來りしなり。渠等既に此の邊を徘徊するとせば、童子等は直ちに防戰の準備をせざるべからず。二名は蒼黄洞に走せ歸りて、其の目擊せし所を語り、一同直ちに手分けして防戰の準備をなし、晝は洞上岩壁の頂に一人の見張りを置きて、八方を注視せしめ、夜は亦た湖畔に面せる洞の裡の口と、川に面せる表の口と、二所に各一人の見張りを置き、二所の戸は均しく堅牢なる門を以て之を鎖せるがうへ、戸の内がはには、多く大石を積みて、スハといはゞ直ちに内より此處に胸壁をつき立つるを能ふやうにせり。戸側に穿ちたる窓は、直ちに用ひて以て矢間となして、此處に二門の大砲を分ち排して、一は表の川に面せる口を守り、他の一は裡の湖畔に面せる口を守る。其の餘、施條銃、連發短銃の數を悉くして取り出だされ、諸童子に割りわたされしは、言ふを待たず。

言ふまでもなく圭兒は諸童子の作す所を賛して、共に及ぶ限りの力を、是等の準備に盡したるが、然かも其の心の底には、是等の諸童子と、かのセベルン號

の水夫等との身体膂力を較算して、深甚の危懼不安を懷くを免れず。斯るをりに、せめて伊範の此處に在らば。

抑も伊範は今ま如何になりゆきしならむ、或は渠等惡漢の毒手に罹りて、既に亡き人となれるに非ざるを得むや。是も亦た必ず有るべからざるの事にあらず、何となれば、渠等今ま陸の上に在り、復た渠の航海術に用ふる所無ければなり。既にして十一月の二十七日となれり、過ぎし二日間の暖氣は蒸し熱くして、殆んど耐ふべからざるばとなりしが、是日は朝より密雲重なり疊なりて、雷聲殷々として遠く響き、其の空摸樣といひ、晴雨計の豫言する所といひ、あらしの將さに至らんとするを示せり。洞外に在りし童子等は、常より早く一同洞内に歸り、例の如く短銃をば物置に引きてひきてみて、表裡二所の戸を閉ぢつ、只だ坐して就寢の時の來るを待ちをれるに、夜九時半を過ぐる比はひより、あらしは果然襲ひ到りて、電光は水を注ぐ如く、窓の間より流れ入りて、常に洞の内を遍照し、霹靂は常に頭上に轟き震ひて、片時も斷ゆる間なし。是れ風無き亦た雨無き、一種の恐絶駭絶のあらしにして、層雲の裡に欝積せる電氣の、一時一所に

決裂噴出する者なり。斯の類のあらしは、或は霹靂一夜をはためき徹して、尚は未だ終りを告げざるを、往々これ有り。洞上岩壁の頂きには落雷、蓋し幾十回若くは幾百回、雨の如く下り注ぎしならむが、岩層甚だ厚ければ、洞内には曾て何等の異狀をも生せず。武安、杜番、馬克太等の諸童子は時々更る〳〵洞外の動靜を伺はむと欲して、戸ぎはに立ち寄りしが、皆な戸を開くを未だ半ばに及ばずして、忽ち雷光に眼を射られて、瞑眩きては却ぞき同へりぬ。天は只だ一面の赤火光をなし、湖水は天の色を反射して、只だ一圓の炎の如く見えぬ。』十時より十一時に至るまでの間は、電光雷鳴共に、眞に須臾の斷ゆる間なく、暴れつゞきぬ。十二時ごろよりはあらしの勢ひ、少しく衰へて、雷鳴次第に間ばらになりゆきしが、既にして風起りて、雨盆を覆へす如くなり來れり。久しく恐れ縮みて頭を蒲團の裡に埋めぬたりし胡太、土耳、伊播孫、善均等の諸幼年者も、再び勢ひを得て追ひ〳〵頭を擡げ起せり。長年の童子等はあらしの最早や憂ふべき者なきを見て、心を安じて、各將さに其の寢所に退き去らむと欲するなり、獵犬ッハンは忽ち激昂の狀を現はして、裡の戸ぎはに走せ到りつ、

前足もて頻りに戸板を爬きながら、低く長く哮り吠ゆぬ。杜番「ッハンが何事か戸の外に異狀あるを嗅げりと見ゆ」言未だ全く訖らず長年の童子等は、各武器を執りて、防戰の身搆へせり。杜番は裡の戸に、莫科は表の戸に、各耳を帖して外の動靜を伺ひしが、何等の異なりたる狀も無きに似たり。然れども、ッハンは依然哮りくるひて休まず、俄かにして轟然として響ける一道の聲あり、是れ決して雷鳴の聲ならず、長銃の聲にして、しかも此處より二丁とは隔てざる近距離の處に於て放ちたる者にまぎれ無し。一同は覺えず面を視あはせしが、杜番馬克太韋格虞路の四名は、早くも表と裡との戸の側に分れ立ちて、若し此處に推し入らむと欲する者あらば、直ちに射て之を殪さむと身搆へ、他の諸童子はかねて戸の内に積みおきたる大石を、戸ぎはに運びて以て、胸壁をつき立てむとす。

をりしも戸外に忽ち聲ありて。「助けて、助けて」是れ疑ひもなく、危難に迫りたる人の救を乞ふの聲なり。「助けて、助けて」。この度は既に近く數尺の間に來れり、圭兒は初めより童子等と倶に、戸ぎはに立ちをりしが、忽ちにして「是

れ渠なり」。武安「渠とは」。圭兒「戸を開け、疾く開いて渠を納れよ」。童子等は戸を開けり。一個の漢子の全身濡れくたれて、上衣の裾よりは水瀑布の如く流れ下りつゝあるが、闖然跳り入りぬ是れ即ちセベルン號の二等運轉手伊範なりき。

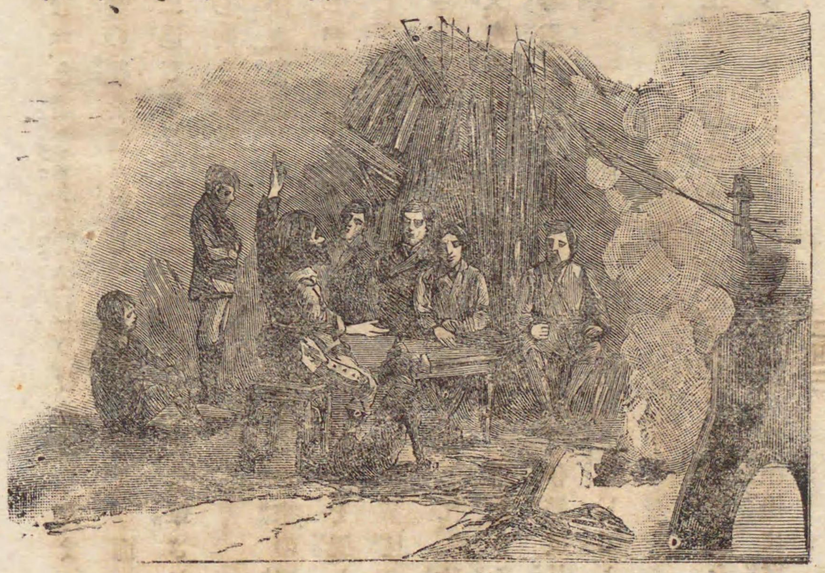
童子等は事の意外に茫然として、暫しは爲さむ所を知らず、空しく伊範の模樣を瞻りてをり。伊範は齢二十五乃至三十歳の間なるべし、肩廣く、胸寛く、兩眼鋭くして、態度毅然とし、面相怜悧にして正直なり。然れども久しく剃刀を用ひざれば、双頰の髯亂生して、殆ど其の顏の半ばを沒せり。渠は内に入るや否や、直ちに戸を閉ぢて其の耳を戸に帖して、外の動靜を伺ひしが、己れを追跡する者無きを知りて、始めて洞の中央に進み來り、己れを環り立てる童子等の顏を一わたり看まはして、悄然と「成程、是少年童兒のみなり」と獨語せるが、復た圭兒の童子等の内に交り立てるを見て、俄かに打ち喜べる面持にて、「圭兒、汝が存らへて」。圭兒「然り伊範、吾身は無事に存らへて此處に在り、上帝は既に吾身を救ひ、亦た御身を救ひたまへり、今夜御身の此處に來れるは、

亦た上帝の御身をして、是等無辜の憐むべき諸童子を助けしめむと欲したまふ大御心なるべきなり」。伊範は復び童子等の顏を看一看して、「都合十五人、而かも自から防ぐを能ふ者は僅かに五六人に過ぎず」。武安「余等は將さに襲撃されむとする乎」。伊範「否な、少くともさし向きの處は否な」。

一同は伊範の此處に來れる顚末、殊に倭東等が本島に上陸してよりの以來の歴史を、渠に聞かむと欲するに熱心なりしが、渠は先づ其の濡れたる被服を脱し、且つ多少の食物を乞ひたしといふ。蓋し渠はニウジランド川を泳ぎ渡り、且つ今朝來未だ曾て何等の食物をも口にせざるなり。武安は直ちに渠を導きて、物置の室に至り、乾きたる被服を與へ、又た莫科に命じて取りあへず、冷たき炙肉、乾餅、茶、及び一盃のブランデー等取り揃へて渠に供せしめぬ。伊範は是等をたべ畢りて、氣力殆ど常に復せる後、一同に向て、其の本島に上陸してより以來の歴史を語りはじめぬ。

「余等の乘りたる傳馬船が斯の島に打ち上げられて將さに岸に達せむと欲するを、余等六名は浪に洗はれて海中に陷りたり、六名は兎角して纔かに濱邊に登

るをを得たるが、他の舟に留まりたる二名の往きし所を知らず、圭兒に至ては一同に、海中に弱れたる者となして、復た之を疑ふ者無かりき、余等の濱邊に登りしは午後七八時の間なりしが、濱邊を彷徨徘徊するを多時にして、十二時ごろに至り始めて傳馬船の沙場に打ち上げをらるゝを發見せり」。杜番「余等は當夕恰かも其處にゆき合せて、二個の人の船の側に、死人の如くなりて横臥するを目擊せしが、次の朝往て之を尋ねたるに、既に其處に在らざりき」。伊範「其の次第こそ余が此より將さに語らむと欲する所なれ、余等が其の往きし所を失ひて或は海中に



死せしならむと思ひ居たる福倍及び排克の二名は、亦た船と共に、濱邊に打ち上げられてをり、倭東等は之を喚び醒して共に、船中にのこり存したる少許の食物及び武器硝藥を取り出だして、更らに海岸をたどり行かむと欲するをり、祿屈なりしと覺ゆ、圭兒の見えざるよしを不審したるに、倭東は、其の定めて海中に陷りて亡せたるならむと答へ、且つ是れ勿怪の幸ひなりといへり、余は之を聞きて心の中に、渠等の余を視るをは猶ほかの婦人を視る如くなるべしと思ひ、渠等は余に復た用無きに至らば、直ちに余を除き去らむと欲するならむと思ひたり、圭兒、汝は當時何處に在りしや」。圭兒「かの欹立ちたる船の底の下に、渠等は余の姿を見る能はざりしが、余は逐一渠等の問答を聽くを得たり、渠等の立ち去るを待て余は起きて反對の方に走り、終に是等童子等諸公に救はれて、斯の佛人洞の中に來れり」。伊範「佛人洞とは」。左吡「即ち余等が斯の洞に命ぜし所の名にして、此の外亦た家族湖、南澤、ニウジランド川等の諸名目あり」。伊範「甚だ好し、甚だ好し、是等地名の事に就ては、明日復た緩やかに相語るべし、戸外に何等か足音せしにあらずや」戸ぎはに立ち番せる莫科「否

な」

伊範「さて濱邊をたどり行くを又た一時間許にして、余等は一團の樹叢の下に達し、此の夜は此處にあかして、翌日再び傳馬船の處に還り、爾後數日の間は、種々術を盡して船の破損を修繕せむと勉めしが、之を修繕すべき道具の不足なるよりして、遂に成功する能はず、因りて兎に角に先づ食料及び清水と且つ能ふべくは風雨を庇ふ處を索めて、假りに卜居したる後、緩やかに後の計を爲すべしとて、復た此處を發し濱邊に沿ひて南に行くを十二マイル許せしに、一條の小川の口に達せり」。左吡「即ち余等が東方川と呼ぶ者にして、其の注ぐ所を欺騙灣と稱す」伊範「成程、かくて余等は此處に卜居して、かの傳馬船をば濱邊づたひに曳きて新卜居の處に來り、之を川口の小港に繫ぎおきたり」。武安「即ち巨熊港」。伊範「是に於て余等の欠く所は、只だ一式の木匠器具のみ、若し之さへ有らしめば余等は容易に船を修繕して、斯の島を去るを得べし」。杜番「余等は恰かも其の器具を有せり」。伊範「倭東等も亦たしか信ぜり」。吳敦「渠等は如何にして、余等の此處に在るをを知れるや」。伊範「約十日許前なりき、渠等

は余と偕に、――上陸以來渠等は片時も余を一人にて置きしをなし――、川の堤を溯りて茂林の中を逍遙するうち、忽ち一座の大湖の畔に出でしが湖濱蘆葦の裡に於て、余等は偶ま一個の巨物の油布にて蔽はれたるが、横はりをるを發見せり、余等の驚怪想ひ見るべし」。杜番「即ち余等の紙鳶なり」。伊範「余等は未だ遽かに其の何物なるやを猜し得ざりしが、兎に角に其の天生のものならぬは明かなれば、渠等は此より之を製作せし所の人を索めて、其の何者なるやを知らむと欲するに熱心となれり、余に於ては、此に由りて本島に住民有るをを知りて、間を伺ひ渠等の毒手を脱して其の住民の中に投ぜむと欲するの心、尤も切になれり、縱ひ其の住民をして蠻人ならしむるとするも、尙ほ是等セベルン號の殺人賊の極惡なるには至らじと信じたればなり、渠等も余の機を察したりと見にて、其の余を看守するを、此より更らに一層嚴重となれり、渠等は是日より一心不亂に、而かも十分戒慎に戒慎を加へつゝ、湖の東岸に沿ひて、南方にさがし行きたるが、曾て人の踪跡らしき者に逢はず、曾て一發の銃聲さへ聞かず」。武安「そは余輩が互に相戒めて、洞内より猥りに一歩をも出でざるや

うしたればなり」。

伊範「然れども、渠等は終に君等の所在を發見せり、去る二十二日の夜なりき、渠等の一個が始めて斯の洞の近傍に來りしに、適ま君等の戸を開閉するに會ひて、戸の間より燈火の光り乍ち見はれて乍ちきゆるを望み見たり、之を聞ける倭東は、次の日の午後全半日、自から斯の前の川ふちの茂林の中に來り潜みて、君等の動靜を伺ひたり」。武安「然り、余等は之を知れり」。「君等之を知れりとか」。武安「余等は渠の遺したる煙管を、次の朝發見して、之を圭兒に示したるに、圭兒は是れ倭東が所持のものなりと語れり」。

「圭兒の所察は爽はざりき、渠は歸來の後其の煙管を遺失せしをを知りて、甚だ之を惜み恨みたりき、然れども渠は斯の半日の間に於て、此處に栖める君等の皆な少年童子なるをたしかめ得たり、そは君等の更はる〳〵洞の前、川のふちに出でであるくを觀て、乃ち之を察し得たるなり、余は渠が歸來の後、其の目擊せし所を其の侶伴に告げ、且つ之に對する攻擊の方法など、さま〳〵に相謀るを聞きて——」。圭兒「惡人、惡魔、渠等は斯の可憐の諸童子に對しても、更

らに一點の惻隱の心を起さどりしし歟」。「然り、猶ほセベルン號の船長乘客に對して之を起さどりしに同じ」。圭兒「して御身は如何にして、終に渠等の毒手を脱がれしや」。

伊範「今朝より倭東等は、余を福倍と祿屈との二人に看守せしめおきて、一同他に出で行きたれば、余は是れ無二の好機會なりと思ひ、二人のよそ視せる間を窺ひて、突然かたへの茂林の中へ逃げこみたり、是れ午前十時前後の事なりき、二人は余の逃走を計るを見て、直ちに余のあとを追ひて、同じく茂林の中に入り來れり、此より一人の逃走者と、二人の追奔者とは、終日茂林の中を跑けめぐれり、余は生來未だ曾て此の如く疾く且つ久しく跑けりたるをあらず、余は十四時間三十マイル以上の距離を跑けめぐりしなるべし、余は倭東の語る所によりて、君等の栖む所の湖の南西岸に於て、西方に流るゝ川の畔に在るを知り、茂林の中を右左に跑けまわりつゝも、君等の洞を望みて逃走し來れり、二人は各銃を携へたれば、余を追ひかけ〳〵も、屢ば之を發して余をねらひ擊ち、飛丸の余の耳邊を掠めて過ぎし者、啻に一度二度のみにあらず、若し二人

をして火器をだに有せざらしめむには、余は立ちて渠等の追ひ至るを心靜かに待てるなるべし、余も隨身の小刀は一口藏しゐたれば、縱ひ渠等と相遇ふも、余獨りは死なざるべし、余は夜に入らば闇黑にまぎれて、二人の追躡を免かるゝに、更らに好便かるべしと憑みたるに、二人は執念く余に尾して、なか〳〵に余を離れず、加るにあらしの常に電光を送りて地上を遍ねく照らしたれば、余の姿を躲過するを許さず、然れども余は兎角して竟に川の南岸に達したり、若し一たび斯の水をだに踰えむには、と余は喜びつゝ、將さに堤をすべり下りむと欲するとたんに、忽ち閃然なる一道の電光は、やみを破りて余の姿を照らし出だせり、同時に一發の銃聲余の背後に響けり」。杜番「即ち余等の此の裡にありて聞きし所のものなるべし」。

「飛丸は余の肩をかすりて流れたり、余は同時に身を飜へして水中に跳入りぬ、余は三五度拔き手をきりしが早くも此方の岸に泳ぎ着きしにゞ、其のまゝに川の上に掩ひかゝりし雜木の下に身を潛めぬ、二人は正さに川の對岸に到りて相語りつゝあり、一人云く汝はたしかに命中したりと爲すや、他の一人云く余は

たしかに手答へありたり、前者云く然らば渠はこの水中に沈みしならむ、後者云く勿論なり此度は渠も竟に往生せり、前者云く好結果好造化と、かくて二人は故來し路に歸りゆけり、此より二三分間の後、余は堤をはひ登りて、地上に登りたちたるに、忽ち犬の吠ゆる聲を聞きしにゞ、乃ち之をたよりに、此處に來りたるに、君等の戸を開きて迎へ納れらるゝに逢ひて幸に、身を全くするを得たり、童子諸君、此よりは余等倶に一團となりて、力を戮せて、斯の嶋より是等の惡漢子を除き去るをを勉めざるべからず」。伊範が是等最後の數語を陳べしときは、其の意氣誠に凛然として、童子等は一同に、覺えず起ちあがりて、直ちに渠の後に從ひて走せ出でむとなしたりき。

既にして諸童子は更る〳〵詞短かに、己れ等の此處に漂流せし顚末を伊範に語り、聞かせり、伊範「君等が此處に漂着してより、今日まで二十個月の間、曾て一隻の船もこの沖に見えざりしか」。武安「然り」。「君等、何等か信號を揭げおきしか」。「之を揭げおきたるが、六週間前、倭東等のために見られむをを恐れて、之を卸したり」。「君等の用心極めて善かりき、然れども渠等は遂に諸君

の所在を發見せり、今に及では唯だ日夜警戒して、渠等を防ぐの一法あるのみ」。

「渠等の此の如く兇惡無慚の輩なるは、誠に何等の不幸なるぞ、若し之をして善人ならしめは、余等は喜で及ぶ限りの助けを渠等に假さむものを、余等は人多しと雖も、皆な少年童子に過きず、余等は當さに大苦戰を覺悟せざるべからず、若し勝敗の決に至りては、誰れか之を豫料するをを得むや」。圭兒「諸公、諸公、今日まで常に御身等を冥護したまひたる上帝は、必ず今日御身等を棄てたまはざるべし、上帝は現に武勇なる伊範を送りて、御身等を助けしめたまへり」。「伊範萬歳、伊範萬歳」の聲は、一齊に童子等の口より起りたり。

第十四回

セベルン號の傳馬船　○ハノーバル島　○說明と講釋　○マゼラン海峽　○將來の計畫　○目下の防禦　○力取乎　○智取乎　○二個の漂流水夫　○半の活劇　○圭兒の慰解　○福倍の糺問　○杜番の負傷　○第一第二の銃擊　○洞邊の叫聲　○武安の失踪　○偵察　○夜

諸人の談を默聽しゐたる吳敦は、是時始めて口を開きて、「然れども、若し倭東等がおとなしく斯の島を去るをだに諾かば、余輩は必すしも渠等を敵視するを須ひざるべし」。伊範「何の謂ひぞや」。吳敦「余の意は、若し渠等にして其の船を修覆するををだに得ば、渠等は直ちに此の地を去りて必ずしも余等に寇する者にあらざるべし、と謂ふなり、故に余等若し渠等の許に往きて、渠等が需用する所の修復の器械は余等之を貸假すべし、其の代り渠等は船を修覆し畢り次第直ちに斯の島を去るべし、とかけ合はゞ、渠等定めて余等の言を聽きておとなしく此地を去るべきなり、然はおもはずや伊範君」。是れ有理の言なれば、一同大に然りとおもふ色、面に見えたる中に就て、伊範は「そは誠に理有るの說なり、然れども諸君は未だ深く倭東等の人となりを知らず、抑も渠等の人となり、若し諸君が渠等に木匠器具を貸假せむと申出ださは、渠等は之を借りたるがうへ、更らに自餘諸物をも併せ奪はむと欲するなるべし、渠等は或は諸君がスロウ號より取り來りて藏しおける貨幣有らむを疑ひて、之を奪はむと圖るなるべし、諸君或は渠等を以て、我れ先づ助けを渠等に貸假せむをを申出でなば、渠等は其の恩義に感じて、此の如き惡心をば崩さゞるならむと爲す乎、渠等は

決して此の如き人理を具へたる者に非ず、且つ渠等の欠く所は、啻だ木匠器具のみならず、其の硝藥亦た漸やく空乏せり、渠等は猶ほ、以て諸君を襲撃するに足るほどの硝藥は、之を有せるならむも、以て久しきを彌るべきにあらず、故に若し諸君の此の如く硝藥に富むを知らば、必ず之を讓與されむをを強請するならむ、諸君は之を聽くべきか」。吳敦「否な」。「聽かれずば、渠等は腕力に籍りても必ず之れを得むと欲するなるべし、事此に至らば、到底一戰を免かるべからず、既に一戰の免かるべからざるを知らば、初めより計を定めて戰ふの利有るに如かず」。吳敦「御身の言是なり、余等は守りを固くして以て寇を待つより外に、復た爲すべきの策無し」。「余が渠等に木匠器具を貸假するを以て不可なりと爲すは、是れ別に他の一個の道理ありてなり、若し渠等にして船を修覆し畢らば、渠等は縱ひ諸君の恩義に感じて、佛人洞に寇するをなく、かとなしく此處を去るとするも、渠等は余等を顧念する所なく、相率ゐて浩然獨り此處を去るべし」。左吡「而して、是れ余輩に何の關係あるや」。「若しかの傳馬船を失はゞ、余輩は復た何に藉りて斯の島を脫がれ出づるを得むや」。

吳敦「御身はかの船を用ひて、以て斯の島を脫がれ出でむと欲するか」。伊範「勿論、然り」。杜番「かの小さき船を用ひて、淼々たる大平洋を横ぎり過らむと欲するか」。「かの船を以て太平洋を横過するとや、否な、余輩はかの船を用ひて近き港にわたり着き、此處より更らに便船を求めて、以て濠洲に還るべし」。馬克太「然れども、彼が如きこわれ船を以て、數百里の波濤を踰ゆるをを得べきか」。「數百里と、否な余輩が航過すべき最近の路程は、三十マイルに出でざるべし」。

杜番「然らば斯の島を環遶する所の水は、大洋にてはあらざりしか」。伊範「島の西方を圍めるは然り、東南北の三方を圍めるは然らず」。吳敦「さては、余等が初めより疑ひたる如く、余等は眞に大陸を距る遠からざる處に在りたるか」。「諸君は從來何處に在りとおもひ居しや」。「太平洋中の一孤島に」。「島は則ち島なり、然れども是れ孤島にあらず、南亞米利加の沿岸に蟻附したる群島中の一個なり、諸君は既に種々の名を島内各地に命じたり、島にも亦た其の名を命じたるか」。「然り余輩は之に命じてチエイマン島と曰へり、是れ余輩が共に學

びたる學校の名に取りしなり」。

伊範「チュイマン島、好し、さらば斯の島は新舊二個の名を荷ふ者なり、何となれば、世間には已でに久しくハノーバル島の名を以て傳へ稱せられたればなり」。

説き罷みて伊範は、明日更らに地圖に照らして本島の所在及び方位のことなど詳らかに示し語るべしと約して、一同と共に寢所に退きぬ。

吳敦及び莫科の二童子は、各武器を執りて、洞の表裡の口に座を占めて、夜を警しめしが一夜は事無く天明けて、十一月の二十八日となりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

南亞米利加洲の南盡頭に、東のかた太西洋より、西のかた太平洋に達して、地骨を横斷して蜿蜒奔流する所の、長さ三百八十マイルに亘る、一道の海峽あり。兩岸連山掩映して、高きは拔海三千尺に至る、沿岸港灣多くして、船を泊するに宜しく、繁く茂林清川有て、到處汲水伐薪及び獵禽の便を欠かず、舟子の二洋を往復去來する者皆な其のレマイル海峽を過ぐるより捷くして、ホルン岬を

遶ぐるより風波の險少きを喜びて斯の路に由る者多し。是れ即ち一千五百二十年有名なる葡萄牙の航海者マゼランの發見せし、所謂マゼランの海峽是れなり。

マゼランが斯の路を始めて發見してより、後五十年にして、西班牙人始めて此處に來りて、ブランスウヰック半島にフハミーン港を創開し、次で英吉利人來り、和蘭人來りて、和蘭人レマイルは、所謂レマイル海峽を發見せり、是れ一千六百十年のことなり。十七世紀の季より十八世紀の首に至りて、佛國人亦た多く此處に來り、爾後有名なる各國航海者の此處に來りし者、枚擧するに遑あらず、殊に近ごろ蒸氣機關の發明ありて、船は逆風逆潮を懼れずして自由に航走するを得るに至りてより、二洋に去來する者の、斯の路に由る者尤も多し。

海峽の北岸はパタゴニア國、及びキングウヰリアムスランド、ブランスウヰック半島の諸地にして、其の南岸は、即ちテラデルフエーゴ及び其の他の群島なり。

マゼラン海峽の東口は、豁然として一大灣を作り、天空海濶一物の眼界を遮ぎ

る者なしと雖も、其の西口即ち太平洋に接する所は、小島群布して、小海峽錯流紛糾し、斯の群布せる小島の一帯は、常に智利國の濱邊に平行しつゝ、點々相逐ひて北に上り、遂にチョノス及びチロー諸島に至りて止む。

伊範は次の日諸童子を集めて、地圖を展べ、南亞米利加洲南端の地形を指說しつゝありしが、更らに、其の語を續ぎて、「看よ、此の如くマゼラン海峽の西口より、北に向ひて、智利國と平行しつゝ走る所の一帯の群小島の中に、南ムケムブリッヂ島と相對し、北は近くマドル島及びチヤタム島と相望みて一島あり、斯の島は南緯五十一度、西經七十四度三十分に在りて、名をハノーバルと曰ふ、是れ即ち諸君が之にチエイアマン島の名を命じて、二十個月以上の光陰を此に消したる所のものなり」。吳敦「然らば、余等は智利國とは唯だ一肱の水を隔てたる處に在りしか」。伊範「然り然れども諸君が幸ひに對岸の大陸に渡航するを得たりと假定むるも、諸君が此より智利或はアルゼンタイン共和國の市邑に達せむと欲するには、更らに數百マイル荒漠不毛の曠野をさまよひ行かざるべからず、其の疲勞困頓は蓋し想像の外に在るべし、加るに是等曠野に彷徨する

蠻人は、亦た好意をもて諸君を待遇するの主人に非ず、要するに、諸君が對岸に航渡せず、始終斯の島に留まり居たるは、諸君のために計るに非常の幸なりしなり」。

蓋しハノーバル島を遶ぐる所の海峽海門は、其の狹き處は十五マイル乃至二十マイルの廣さなるに過ぎず、若し天晴風和の日ならむには、莫科がかの短艇に棹さして、以て容易に航渡するを得べかりし所なり。渠等が東北の濱邊に立ちて、屢ば陸影を探望したりしにも拘はらず、終に之を視るを得ざりしは、隔海諸島の皆な地低く岸平かにして、之を見るべからざりしを以てなり。且つ仔細に地圖を檢すれば、渠等は不幸にして、毎ねに諸島を相距るを最も遠き位置に立ちて、之を探望したりしなり。唯だ杜番等の一行が、セベルン海岸に抵りたるをりは、應さに明かにチヤタム島の南岸を見るをを得べかりしに、生憎や重霧は海を鎖して、咫尺の外を辨ぜしめず。武安の望み見たる白點は、疑ひもなく雪を被りたるアンヂス山嶺中の一個なるべく、其の紙鳶に乘りて空中より望み見たる赤光は、同じ地方の噴火山の一個の影なりしなるべし。

吳敦は伊範に向ひて、若しセベルン號の傳馬船を得て、此に藉りて斯の島を發するとせば、將さに何れの方位に向て其の船を行らむとするやと、問ふに伊範は直ちに之に答へて、「一直線に南に向て、勿論余等は順風を得ば智利國の沿岸の何れかの一港に達するを甚だ難からざるべく、沿岸の居民は親切に余等を待遇しくるべく、然れども智利國の沿岸は曲折出入一ならずして、船を行るに甚だ危險多し」。武安「此より南に航走せば、何等か余等の故鄉に還るべき便宜を得べき地に至るべきか」。「然り、試みに地圖を看一看せよ、余等此より南に下りて、スミス海峽に至り、斯の海峽を過ぎば、何の處に出づべきや、即ちマゼラン海峽の西口に出づべし、此處にタマルと呼べる一港あり、余等若し此の港に達するを得ば、定めて歸國の便船を得るに難からざるべし」。武安「若しタマル港に於て急に便船を得る能はずば」。「マゼラン海峽の内に入りて、行くを少許すれば、即ち左にブランスウサック半島を得べし、半島にフホーテスキウ灣ありて、灣にガーラント港あり去來の船の屢ば下碇する處なり、又た更らに進みて、半島の南端フロワード岬を遶ぐれば、即ちブウゲサンビール灣あり、海

峽を去來する船の最も多く投泊する所なり、又た更らに進めば、フハミーン港あり、パンタアレナあり」。

伊範の說是なり、彼等一たびマゼラン海峽の内にさへ入るを得ば、其の濠洲或はニウジランドに行くの途中にある船を索めて、之に其の情を語り、附乘を乞はむは、甚だ難きわざに非るべし。海峽の内にありて、タマル港、ガーランド港、フハミーン港等は皆な貧寒の僻地なりと雖も、パンタアレナは富邑にして、日常必需品より娛樂奢侈の品に至るまで、件々略ぼ皆な有り、智利國政府の創開管轄する所にして、美麗なる寺院さへあり、其の屋頂巍然として、茂樹の上に聳え、海上より之を望み見るべし。

故に童子等の先務は、マゼラン海峽に達するに在りて、之に達するには、かのセベルン號の傳馬船を用ひざるべからず。而して之を用ひむと欲するには、之れ倭東等の手より分捕りて、己れの有とせざるべからず。即ち渠等と戰ひて之に打ち勝たざるべからず、然れども之れ、勿論、容易の談に非ず。伊範は童子等と語りて、此に至れるとき、己れは先づ洞の位置を觀て、倭東等が來り攻め

むとき之れを禦ぐべき法を講ぜざるべからずとて、一同と共に、席を離れて洞の内外を巡覽せるが、洞の表はニウジランド川に面し、裡は家族湖の濱を控へ、窓は直ちに矢間をなして、茲に二個の大砲と八個の旋條銃を按排し、洞の中には尚ほ多くの短銃及び刀斧あり、要するに武器完足糧食豐饒なるを見て、大に喜びしが、顧みて之を守る所の人を思へば、皆な少年童子にして、其の齡十六歳に達せるは獨り吳敦一個あるのみ、其の他武安、杜番、虞路、馬克太章格の五名は、洞中の長者と稱せらるゝ者なりと雖も皆な十五歳に滿つるか滿たざる者にして、餘は多く筋骨未だ固まらず自から捍ぐをさへ且つ能はざる幼年童子なり、而して寇は七名共に皆な、膂力衆に超え曾て幾回の人殺しをさへ經來りたる倔强の壯歳漢子なり、則ち童子等心如何に勇なるも、到底戸外に於て對等の戰ひをなし得べきに非ず、故に渠等目下の上計はいつまでも、唯だ堅く斯の洞壁の固めを守りて、以て敵の來るを待つより善きは莫し」。

吳敦「渠等は皆な、眞に一毫の人情をも具へざる兇暴無慚の徒なるべき乎」。伊範「勿論、然り」。圭兒「然れども唯だ一人、一點の良心未だ全く滅び盡くさゞる者あり、即ち吾身の一命を救ひくれし福倍是れなり」。伊範「余はその說を首肯し難し、福倍は或は勿めは倭東等の勸めに遭ひて、其の夥中に入りし者ならむやも、知るべからざれども、現時に及んで、亦た倭東等一輩の惡人にして、彼是の差等あるべしとは思はれず、近くは渠が祿屈と共に余を追ひしを見ずや、其の屢ば余に發銃し、余が川に溺れしと誤り信ぜしとき、祿屈と共に大に之を喜びしを見ずや、其の御身を救ひしは、蓋し烹飪其の他の事をなさしむるに、御身を生かしおくをの甚だ便宜あるを以てなり、若し倭東等が斯の洞を來り攻めむをりは、看よ、福倍は必ず其の先登者の中に在るべし」。是より數日を過ぎたるが、倭東等の形影は杳として、何等の消息もあらず。伊範は心大に之を怪しみて、其の何故なるべきをおもひ惑ひしが、是日忽然として思ひあたれる所あり。武安及び吳敦に向ひて、其の思ふ所を語りて云く「余をして渠等ならしむるも、亦た必ず此の策に出でしならむ、渠等は諸君を以て、已れ等の斯の島に上陸せしをを全く知らざる者となせり、何となれば、圭兒は既に海に死し、余は既に川に溺れたる者と信じをればなり、渠等は故に以爲ら

く、若し渠等の一人が突然斯の洞に來りて破船漂流の人なるをを語りて憐れみを乞はゞ、諸君は必ず親切に之を洞中に迎へ納れて、成るべきだけの助けを與ふるならむ、若し一だび洞中に入るを得ば、隙を伺ひて内より戸を開きて、其の侶伴を招き納るゝは、極めて容易なるべく、若し斯の如くせば多くの力を費やさずして以て洞を襲ひ取るを得べしと、渠等は蓋し諸君を力取せむよりも、寧ろ智取せむと欲して、此の如く遲々しをるなるべし」。「然らば、予輩は如何にして之を禦ぐべきや」。「力を以て來らば力を以て之に應ぜむ、計を以て來らは計を以て之に應ぜむ」。

翌日も亦た事無くたちて、既に黄昏となりたるが、岩壁の頂きに在りて見張りしゐたる乙部及び虞路は、忙がはしく洞に走せ歸りて、川の對岸に二個の人の姿ありて、次第に洞のかたに來り近づくよし、を報ぜり。圭兒と伊範とは、急に物置の裡に身をかくしつゝ、窓の間より、來り近づける二人を、遙かに望み視るに、是れ祿屈と福倍の二人なるを知り得たり。伊範「果して余の料る所に違はず、渠等は漂流人のまねして、斯の洞に入むと欲するなり」。武安「予等は

之を如何にすべき」。伊範は武安等の耳に口をよせて、低々密語する所あり、畢りて已れは圭兒と共に物置の一方なる戸棚の内に身をかくしぬ。

此より一二分を過ぎて後、吳敦、武安、杜番、馬克太の四童子は、出でゝ川の畔を逍遙せるに、彼方の岸より之を望み見たる祿屈福倍の二人は、愕然打ち驚きたる面もちにて、四童子のかたに走せよるに、吳敦等も二人の姿を見て、甚だ其の意外なるに驚きし色あり。二人はやう〳〵川を渉りて、此方

の岸に登りたるが、疲勞憔悴の情は其の言貌に顯はれたり。杜番「御身等は何者なるや」。「今朝斯の島の南方にて破船したる、遭難水夫なり」。「英國人か」。「否な米國人なり」。「他の乘組員は」。「皆な溺れ死せり。唯だ我等二人のみ幸ひにして濱邊に漂着するを得たり、御身等は何人なりや」。「本島の植民者なり」。「然らば、御身等願はくは我等に少許の食物と休息の處とを與へたまはれ、今朝來我等は一掬の水だに、快くは飲む能はざりき」。吳敦「破船水夫は到る處に全胞の助けを求むべき權利あり、此方に來れ」。

祿屈は額狹く顴つき出でゝ、一見して恐るべき獰猛の相を具へり、福倍は面上何處にか猶ほ一點人らしき相ありて、祿屈の如く兇惡ならず、倭東が特に渠を擇みしは、此を以てなるべし。二人は始終極めて巧みに遭難水夫のさまを演じたり、童子等があまり精しく問ひつめて、答へに窮するをりは、あまりに疲勞して長く語るに堪えざれば、少時の休息を許るされたしといふに托言して、之を遁がる。然れども渠等が始めて洞に入りしとき、偸かに四下の模樣を視まはし、其の守備の嚴重にして武器の完足せるを見て、心大に驚きたる色ありしは、

慧眼なる吳敦の早くも、旁らより窺ひて心に記るせる所なりき。既にして、二人は童子等に導かれて物置の洞に入りて、其の一偶に横臥せるが、極めて疲勞したる人の如く、早くも鼾然として前後も知らず熟睡せり。然れども渠等が其の睫を合はす前に、物置に貯へある糧食器物其の他諸具の極めて豐饒なるを見て互に目と目を視あはせて、十分懽喜の色を顯はせるは、亦た吳敦の旁らより窺ひて心に記るせる所なりき。九時に及ぶ比ほひ、莫科は二人の寢ねたる反對の偶に來りて、其の臥牀を設けて、眠りに就きぬ。僞はり熟睡したる二人は、黑人の子の此處に來り寢ねしをを知りたるも、更らに之を意に介せず、若し渠が聲を發して人を喚ばむとせば、渠等は之を拉ぎ殺さむを、唯だ一擧手の勞なればなり。

かくて又た二時間を過ぎぬ、二人は依然横臥したるまゝ、身動きだもなさず、莫科は二人の或は今夜は此のまゝに過ぎて、明夜を待ちて事を擧げむと欲するに非ずやと、疑ひはじめぬ。既にして十二時となりぬ、二人は徐々として身を起して、拔き足しつゝ戸のかたに進みよりぬ、天井より吊るしたる燈籠の光は、

明かに二人の擧動を照らし出だしぬ。物置の戸即ち川に面せるがはの戸は、門を堅くさしたる上、内より大石を積みかけて、之をおさへあり。二人は先づ是等の石を除きて、方さに門に手をかけぬ。とたんに、一個の鐵腕ありて、方さに門に手をかけたる祿屈の肩を、背後より捉らへ住めぬ。祿屈は驚て首を回へすに、正さにセベルン號の二等運轉手と面を對しぬ。「伊範、汝が此處に」。「來れ諸君」。馬克太虞路杜番武安の四年長童子は直ちに走せ來りて、福倍を捉へたり。祿屈は、其のうちに伊範の手をふり解きて、戸を推し開くや否や、早くも洞外に跳り出でぬ。伊範は直ちに銃を把りて、轟然一發、之を擊ちたるが、丸は空しく闇中に飛びゆきたるのみ、何等の手ごたへもなく、祿屈は早くも遠く遁れ走りたりと見えて、足音さへも聞にずなりぬ。「咄、到頭取り逃がせり、然れども猶ほ茲に一人有り」。言ひつゝ腰刀を拔きもちて、一擊の下に福倍を斫り殺さむと、ふり擧ぐるに、福倍「請ふ饒るせ、請ふ饒るせ」。圭兒は身を以て福倍を蔽ひつゝ「伊範、請ふ渠の命を饒るせ、渠は曾て我身を救ひたり」。「さらは圭兒、今夜は御身の面に免じて、暫らく渠を饒るすべし」。福倍は緊しく縛めて、嚮き

に伊範等の潜みたる戸棚の中に禁錮し、再び戸を鎖し、大石を故の如く積みかけて、一同は武器を執りて、以て天明に至りたり。

翌朝天明くるを待ちて、伊範は武安杜番吳敦の三童子と偕に出でゝ、洞外の動靜を探ぐるに、洞外には多くの人の靴跡の、點々往復縱横せるを見るのみ。倭衆等は遠く退き去りしと見えて、湖畔川邊陷穽林のほとり、何等の異なりたる狀もあらず。厩舍養禽場も、依然として些の攪擾を被りたる迹あらず。然れども渠等は何方より來りて、何方に去りしならむ歟。之を知れる者、若し有りとせば、福倍の外になし。四名は洞に歸りて、福倍を戸棚の中よりひき出だし、索をゆるべて、廣間の中央に推しすゑつゝ伊範「福倍、汝等の計は余輩の猜破する所となりて、無功に歸したるは、汝の目擊して知る所なり、然れども、余輩は猶ほ詳かに倭東の計る所を知らむを要す、汝は必ず之を熟知すべし、余の問ふに隨ひて、逐一之に答ふべき歟」。福倍は圭兒及び諸童子と、面を對するを愧づる如く、頭を低れて、默然として敢て高き氣息さへなさず。圭兒「福倍御身は嚮きにセベルン號虐殺の最中に、獨り敢て身を挺して、吾身の命を救ひ

くれたる善心あり、御身は今ま又た其の惻隱の心を發して、斯の十五名の無辜の童子等を、同じ危運の中より救ふに意無きか」。福倍は仍ほ默然として、答へなし。圭兒は更らに語を繼ぎて「福倍、御身の所行は萬死に抵りたりと雖も、渠等は猶ほ御身の命を饒るせり、御身の身の内には、尚ほ一點未だ全く滅び盡くさゞる良心ありて、存ずるなるべし、御身が現在行ひつゝある所の罪の恐ろしきを省み思へ」。福倍は此に至りて長き大息を洩らしたり、既にして渠は終に口を開きて、「余は何事をなすべきや」。伊範「唯だ倭東が昨夜の計を詳かに語り聞かせ、汝は内より戸を開きて、渠等

を迎へ納れむと謀りしならずや」。「然り」。「若し渠等一たび此理に入らば、彼の如く親切に汝を接納待遇せる童子等は、勿論渠等の毒手に罹りて殘殺さるべかりしならむ、非耶」。福倍の頭は益す低く垂れて、敢て一聲をも得出ださず、「倭東等は何方より、洞にしのび近づくべかりしか」。「湖の北岸より」。「即ち汝と祿屈とは、其の南岸より此處に來れるに」。「然り」。「渠等は曾て斯の島の西岸に往きしをありや」。「未だ曾て」。「渠等は現時何處に在りや」。「余は知らず」。「渠等が今後の計畫に就て、汝何等か推知し得る所ありや」。「否な」。「渠等は再び此處に返り來るべきか」。「然り」。伊範は更に種々糺し問ふ所ありしが、渠は復た答ふる能はざりし

にゞ、再び之を戸棚の中に禁錮して、午後に至りて莫科をして幾品の食物を送り與へしめしに、渠は殆ど一と口も之に觸るゝをなさず、只だ頭を低れて、沈吟思念しつゝあり。渠は何事を思念しつゝあるや、或は先非後悔といへる如きたぐひのもの、其の頭中に萌動しつゝあるには非るか。

目下第一の、亦た唯一の問題は、倭東等の何方を指して、何處まで退き去りたるべきやといふをなり。渠等は斯の一事を明かにせざる間は、決して片時も席に安ずる能はざるなり。故に、伊範は中飯を畢りし後、洞外に出で行きて、之を偵察せんと欲し、之を童子等に謀るに、一同直ちにこの議を賛して。即時其の支度にかゝりたり。伊播孫善均土耳胡太の四幼年者には、圭兒莫科弱克及び馬克太を附けて、之を洞内に留め、自餘の年長童子八名は皆な伊範と偕に、偵察に出でゆくべしと定められぬ。躬方は多く少年童子なりと雖も、尚ほ敵に比して一倍半の衆を有せり、加るに各長銃短銃を携へて、武器十分完足せり、敵は七名の中既に一名を失ひて、六名となれるに、武器は六名の間に、只だ五個の銃を有するに過ぎず、且つ伊範の語る所に據れば、渠等の彈藥は、既に漸や

く匱乏して、餘ます所復た幾何もなしといふ、是れ躬方の尤も心頼みとする所なり。

偵察隊は午後二時、洞をたち出でしが、戸は閂を施したるのみにして、復た石を積みかけず、是れ偵察隊の人が、急に洞中に退き入らむと欲するを、開閉に不便なるを以てなり。渠等は幕員の遺骸を葬りたる山毛欅樹のほとりを過ぎて、灌木茂樹の陰をつたひ〳〵、陷穽林の中に進み入れるに、最先きにたちたるフハンの、耳を張り鼻を地に帖して、頻りに疑はしげなる狀を作すは、何等か異常の臭を、嗅ぎいだしたるものなるべし。更らに幾歩を進み行くに、果して一簇の茂樹の下に、燃にさしたる薪の折れ、煙り未だ全く絶にざる灰燼堆あり、前刻まで人の此處に憩ひ居たることを示せり。吳敦「疑ひもなく、倭東等は昨夜を此處に過ごせしなるべし」。伊範「然り、渠等が此處を去りてよりは、未だ一二時間を出でざるべし」。言未だ全く訖らず、渠等の右邊に、一發の銃聲響きて、丸は武安の額を掠めて飛び過ぎぬ。殆ど同時に又た一發の銃聲、童子等の隊中に起りて、次で渠等と相距る十間許の右方の茂樹の裡に、アッと叫ぶ

聲、ザハ〳〵と人の行動する響き聞えぬ。第二の銃聲は、杜番が第一の銃聲と其の煙の揚れる處とを目的として、發ちたる所なり。杜番は銃を發つと共に、フハンを先きにたてゝ、驀地に彼の茂樹のかたに走せゆきたり。伊範「前へ、前へ、余等は渠一人を敵に委すべからず」。

轉眄の頃に、一同は早くも杜番に追及して、共に茂樹の下に走せ到るに、地上に僵仆せる一個の人あり、呼吸既に全く絶えたり。伊範「是れ排克なり、世界は爲めに一個の惡人を減ずるを得たり」。杜番「自餘の輩は何處に往けるならむ、必ず未だ遠くは遁れじ」。伊範「然り、或は近く此の邊に潜めるなるべし」。諸君跪づけ、高く頭を擡ぐる勿れ」。忽ち渠等の左邊より、一發の銃聲と共に一個の丸飛び來りて、將さに跪づかむとして少しく遲れたる左吡の、右額をかすりたり。吳敦「君は傷つかずや」。「否な眞のかすり傷なり」。雅涅は俄かに心づきて、「武安は何處に往ける」。實に武安は何處に往けるや、是時フハンは、左邊なる灌木叢のかたを望みて、一直線に跑けゆくにぞ、杜番等一同は「武安、武安」と叫びつゝ、フハンのあとを追ひて、走せゆきたり。

虞路は忽ち身を地上に俯伏しつゝ「氣をつけ伊範、氣をつけ」。伊範は直ちに躬をかゞめ頭を下げぬ。說く時遲し、一發の銃丸は、恰も伊範が頭上一二寸の處を飛び過ぎぬ。渠は頭を擡ぐるに、一個の敵の、茂樹の中を穿ちて遁れゆく背影を望み見たり。是れ昨夜取り逃がしたる祿屈なり。伊範は銃を一發せり、祿屈は宛がら地中に沒したるが如く、倏然として姿きえぬ。伊範「咄、再び取り逃がせる歟」。

以上記する所は、是れ唯だ五七秒間の事なりき。伊範は虞路と共に、一同の處に追ひ及ぶに、フハンは連りに高く吠えつゝあり、最先きに進める杜番の聲として、「武安、手をゆるべ勿」。伊範は一同と共に、杜番の聲を索に、灌木叢の中に進み入るに、武安は胡布と相搏ちて、地上に組み伏せられ、胡布は方さに其の懷刀を擧げて、武安を刺さむとしつゝあり。恰かも好し、是時此處に來到せる杜番は、兇漢の右の手を捉らへて、之を動かさず、隻手に腰を探りて、短銃を抽き出ださむとする、手のゆるみを伺ひて兇漢は、杜番の手をふり解きざまに、一刀杜番の胸に切りつけたり。さすが勇膽なる杜番も、叫び聲さへ得たて

す、地に仆れぬ。とたんに。一同どや〳〵と此裡に來り到れるにぐ、胡布は武安を打ちすてゝ、北の方に遁れ走りぬ。韋格、乙部、雅涅等銃をそろへて、之を追ひ擊ちつ、一二發は、たしかに手ごたへのありし如く覺えしが、遂に姿を見うしなひぬ。

武安は身を起すや否や、直ちに杜番のほとりに走せよりて、其の頭を抱き起し、之を呼び活けむと勉めたるが、杜番は僅かに氣息の通へるのみにて、昏々として人事を辨せず。伊範は手ばやく、童子の襯衣の、胸のほとりを破ぶり開きて、其の創を檢するに、創は左胸第四肋骨の邊に在り、幸ひに心臟をば外れたりと見えて、童子は猶ほ氣息を呼吸しをり、然れども其の呼吸の力の甚だ微弱なるは、或は肺を傷つけられしならずやとの懼れあり。吳敦「兎に角に、佛人洞につれ歸らざれば、何事をなさむやうも無し」。武安「余等は必ず渠を救はざるべからず、嗚呼、渠は余の危きを救ふがために、斯の創を得たり」。伊範は、接戰の初めより倭東、武蘭及び武婁の三名が曾て其姿を見せざるは、頗る怪訝に堪えざる所なるも、兎に角に、杜番を斯のまゝに捨ておきて、戰ひつゞくべきに

あらざれは、吳敦等の說に從ひて、一たび洞に歸るとと定め、諸童子と共に、木の枝を採聚して、一個の檐架を編成し、杜番を其の上に穩臥せしめて、四人は之を舁ぎ、他の四人は其の左右を警衛して、徐々洞のかたに歸りゆきたるが、杜番は檐架の行動するにつれて、其の撞觸の創に響きて、疼痛堪ふべからざると見え、時々錐をもむやうなる苦唸の聲を發するにぐ、暫らく休みては、復た行きつ、やう〳〵路の四分の三を步み畢りて、佛人洞を距る一二丁の處まで歸り來れり。

然れども、洞の口は、岩壁の出はなの陰になりをれば、未だ見えず。忽ちニウジランド川のかたにあたりて、童子等の叫ぶ聲聞にぬ。フハンは驚地に聲するかたに奔せ去りぬ。疑ひもなく、是れ倭東及び其の侶伴の幾名が、路を迂して川の畔に出で、この方面より洞を攻擊しつゝあるなり。

第十五回

二個の人質　○危一髪　○福倍の改心　○轟然一聲　○林中の探索　○杜番の容体　○傳馬船修覆　工事　○二月五日　○三疊の讃呼　○煙波渺々　○マゼラン海峡の航行　○グラフトン號　○歸國　○余輩が學び得たる訓言

後に及で考るに、事實は即ち是の如くなりき。祿屈胡布排克の三名が陷穽林の中にありて。偵察隊を狙撃して、其の心を一方に惹ける間に於て、他の一方にありて、倭東武蘭武婁の三名は、徒缸川の川どこの水涸れて乾道をなせるをつたひて、潜かに岩壁の上に攀ぢ、岩壁の頂きを徑りて、ニウジランド川に面せる物置の洞の口のほとりに下りて、乃ち驀然洞の中に闌入したりしなり。伊範は洞のかたに常ならぬ叫び聲の聞ゆるより、虞路乙部雅涅の三名を杜番に附けて、そこに留めおきつ、己れは吳敦武安左毗韋格の四名と共に、捷路を求めて一直線に洞のかたに走せ到れば、時は已でに遅かりき。倭東は一個の童子を奪ひ取りて、之を小脇に抱きつゝ、方さに洞の内より走り出づるに、後より圭兒の追ひすがりて、之をとり還へさむと、空しく挣扎しつゝあり。童子は是

れ弱克なりき。次て洞より走せ出づるは武蘭にして、亦た胡太を小脇に抱きをり。馬克太が後より走せかゝりて、之を奪ひ還へさむと爭ひたるが、武蘭のために推一推せられて、地上にドウと仰ぎ仆れぬ。

然れども、莫科及び其の他の童子は、曾て姿を現はさず。渠等は皆な傷けられ或は殺されて、洞中に横臥し居るに非るをを得むや。倭東武蘭は、既に川のほとりに走り近づきぬ。渠等は川に來りて、何をか爲さんとする。更らに眸を轉じて川の面を視れば、川には武婁の、洞中より短艇を曳き出だし來りて、之を川に泛べ、以て二人の下り來るを待ちてをり。若し渠等にして一たび彼岸に渡り畢らば、復た之に追ひ及ばむを難かるべく、渠等は二個の人質をとりて、悠々巨熊岩下の其の栖居に歸りて、意ひのまゝに我れを苦しめ、我れを虐ぐるなるべし。

然れども、伊範等は其の或は二童子を傷けむをを懼れたれば、銃を發するを能はず。伊範は四童子と共に、足を限りに走せたるが、倭東武蘭は既に川の岸に上れり。是時電光の如くそこに走せ到りたる獵犬フハンは、武蘭の喉を目がけ

て飛びかゝれるにゞ、武蘭は驚き慌てながら、胡太を捨てゝ之を防ぎ、鬪たり。倭東は仍ほ弱克を曳きづりつゝ、岸のかたに進みゆくに、是時亦た突如として、洞の内より跳り出でゝ此方に跑け來る者あり、倭東は首を回へして之を視るに、是れ福倍なりき。倭東は大に喜びつゝ「此方へ來れ、福倍此方へ」。福倍は倭東のほとりに既に近づきしが、物をも言はず倭東に飛びかゝりて、弱克を奪ひ還へさむとす。倭東は意外の襲撃に、覺にず弱克をはなせしが、直ちに其の懷刀を揮ひて以て、深く福倍の腹を刺せり。是れ實に轉瞬間の事なりき、伊範及び四童子は猶ほ相距る五六十間の處にあり、武蘭は纔かにフハンの襲撃を免がれて、既に武婁と共に短艇の中に在り。

倭東は武蘭の胡太を失ひしを見て、益す弱克の必獲せざるべからざるを、思ひつゝ、福倍を殪したる後、忙がはしく臂を伸べて、再び弱克を捉らへむとするに、弱克は此の間に、かねて藏くしもちたる連發短銃を取り出だして、正さに臂を伸べて近づき來る倭東を、望みて轟然一發せり。ねらひは失またず、正さに倭東の胸のたゞ中を射たるにゞ、渠はよろ〳〵と却ぞき走りて、短艇の中に

まろび入りぬ。短艇の中なる二惡漢は驚き慌てつゝ、倭東等を扶け入れたるまゝ、彼岸をさしてこぎ出だしぬ。

忽ち轟然耳を聾するばかりの凄まじき聲起りて、洞の口に煙揚がると見にしが、川の中流までこぎ去りたる、三惡漢を載せし短艇は、忽ち散彈に掩はれて、三惡漢は叫苦の聲さへ發するに及ばず、水中に顚落して見にずなりぬ。

是れ莫科が物置の洞より、かゝねて備へありし大砲を發てるなりき。今やセベル號の惡漢等は悉く亡びて、僅かに向きに陷穽林中にて其の往くへを失ひたる祿屈胡布の二人を餘すのみ。一同は少時の間に、非常の困厄より、一轉して俄かに非常の安心の境に入りしにゞ、皆な氣拔けしたるが如く、暫し茫然としてありしが、武安は第一に我れにかへりて、杜番の擔架を留めかける處に往きて、虞路等に詞短く事の始末を告げつゝ、負傷者をかつぎて、洞に歸り來るに、此の間に伊範等は福倍を洞に扶け入れて、杜番と同じく、床の上に安臥せしめぬ。

是夜は終夜、一同負傷者の枕頭に侍して看護せるが、杜番は依然昏々として人

事を辨せず。圭兒は先ゴニウジヨンド川のふちに繁生する赤楊の葉を摘み來らしめ、之を舂きて煉り藥のやうにし、之を用ひて其の創を裹みたり、是れ内部の燃衝を未だ興らざるに止むる妙劑にして、亞米利加に於て尤も多く用ひらるゝ所のものなり。圭兒は亞米利加に人となりたれば、善く斯の樹の葉の著効あるをを知りて、之を用ひしなり。福倍に至りては、深く丹田を刺されたれば、到底救治すべきやう無し。渠も自から其の死期の既に近づけるを知りしか、ふと目を開きて、圭兒の極めて愁はしげなる顔して己れを俯瞻しをるを見て、かすかなる聲を出だして「多謝圭兒、多謝、然れども勿れ、余は最早やこの世の人にあらず」。嗚呼、斯の人や一たび誤りて邪路に迷ひ、惡人の夥に入りたりと雖も、一點の良心猶ほ未だ全く滅び盡くさゞる者あり、童子等が最後の危急に臨みて、飜然として本然の性にかへり、遂に其の一命を擲ちて、以て一同を救ひしなり。伊範「しかく沮喪する勿れ福倍、汝は既に自から汝の罪業を償ひたり、汝は必ず長生すべし」。然れども渠の運命は既に定まりたりき、一同が及ぶ限りの力を盡して介抱せしにも拘はらず、次第に衰へ弱りて、午前四時、竟に

其の最後の氣息を呼吸せり。

日出を待ちて、一同は之を墓員の墓の隣に葬りて、ねもごろに弔祭したりしが、渠等は猶ほ祿屈と胡布との生死を審かにせざる間は全く心を安ずる能はざるにあり、伊範は吳敦武安馬克太韋格の四童子と共に、朝飯終れる後、ファンを從がへて、二人の往くへを探索に、出でゆきしが、探索するを未だ幾ばくならずして、渠等は直ちに二人の死体を陷穽林中に發見せり。胡布は初め丸に中りたる處より、五十間許を隔てたる雜草裡に斃れをり、祿屈は韋格の多く堀りおきたる陷穽の、一個の中に陷りて死してをり、是れ渠の姿の、忽焉沒して見えずなりし所以なり、二人の死体は、排克の死体と共に其の陷穽中に投下して、之を埋却せり。

五名は洞に歸りて其の探索の結果を報ずるに、一同は再び是等惡漢のために攪擾せらるゝの憂無きをを知りて、大に喜び、且つ安心せるが、安心し難きは杜番の容体なり。更らに惡きかたに赴く。といふには非るも、絶て快きかたに向ふさま無く、依然昏々として人事を辨ぜず。

翌日伊範は武安及馬克太と共に、短艇に駕して家族湖を渡り、東方川を下りて、倭東等が舊の宿處に來りて、セベルン號の傳馬船を索むるに、船は巨熊岩下の沙場の上に曳きあげたり。三個は其の破損處を撿するに、若し空船として曳きゆかむには、猶ほ浮泛航行に堪ふべからざるに非れば、之を短艇の尾に曳きて、再び川を溯り湖を渡りて、是日の夜半過ぎに、無事ニウジランド川の埠頭に歸り着きぬ。洞に歸りて、一同の第一に語ぐるを聞けば、今朝來杜番の容体大に宜しく、知覺もやう〳〵復へり來り、呼吸も少しく長く引くを得るやうなりしと云ふ。是れ蓋し杜番が平生身体壯康なると、赤楊の葉の貼劑の奇効ありしとに由るものにして、此の分にて進み行かば、日子をこそ多く要すれ、終には必ず全癒の望みあるべきが如し。

次の日より、一同は傳馬船の修覆に着手せり。船は長さ三十尺に餘りて、幅亦た之に稱ひたれば、之を修覆し完くせば、十五少年と伊範圭兒の兩人とを、載せて航行せむをは、其の堪へ得ざる所にあらず、伊範はかねて木匠的熟練あれば自から棟梁となりて工事を總領し、馬克太之に副となり、他の諸童子之を助

けて、孜々其の功を急ぎしが、木材はかねてスロウ號を解きたるを、童子等の丁寧に仕舞ひおきたるがあれば、竪材、横材、平板、支柱、件々具有せざるなく、又た木材の縫處を固むるには、かねて藏しおける塡絮をタールもて再煮して、之を用ひぬ。船の半ばまでは甲板にて張りつめ、以て風濤を避くるに便せり、此のころの氣節に於て、此の邊の海にありて、風濤の憂へは甚だ少しと雖も、是れ萬一を慮かりてなり。伊範は又た、童子等がスロウ號より收めおきし、帆類を取り出だして、斯の單檣船に船尾帆、トップセイル、船首三角帆等の諸帆を裝備せり。三十日許を閲みするほどに、修覆は一切出來あがれり。兎角するうちに、童子等が斯の島にて享くべき、最後のクリスマス及び千八百六十二年の元日は、來りて復た去れり、此のごろは杜番も天氣晴和なる日には、杖にすがりて戸外を、少時は散歩するを能ふまでになれり。然れども一同は、渠が充分復常して氣力强旺なるまでには、決して斯の島を解纜せじと決意せり。正月の下半月は、傳馬船につみ入るべき貨物の選擇に日を消せり、諸童子は、勿論其の有せる所のものを、悉くつみ入れたしと希ひしが、船の廣さは到底之

を許さず。渠等が第一に先づ選取せしは金貨なりき、是れ渠等が歸國の途中、到る處に第一必要のものなるべければなり。次に選取せしは、十七名が若干週間を支ふべき食物なり。次に武器彈藥。次に被服。次に書籍。次に烹飪器具及び食器。次に望遠鏡風雨計等の類より護謨舟釣絲等に至る。

二月三日には、一切の貨物悉く傳馬船につみ入れられぬ。杜番の創も殆ど全く癒て、此より渠に憂ふべきは、唯だ其の或は過食せむ一事のみ。氣力は未だ全く復常せざれども、既に航海に堪へざるほどには非るがうへ、渠も亦た之を促がして已まざれば、遂に解纜は五日の朝と定められぬ。解纜の前夕、吳敦は厩舍の戸を開きて、ラマ及びヴイクンアの諸獸、及び七面鳥其の他渠等が久しく丹誠こめて養ひおきし諸種の鳥を放ちたるに、渠等は戸を開かるゝや否や、其の脛の走り能ふ限り、其の翼の飛び能ふ限り、全速力を以て八方に走飛し去れり。雅涅「不記恩的の動物、余等が久しく心を留めて養ひやりし勞も思はで」。左吡左吡「世事皆な此の如し」。左吡の口氣のあまりに老人じみたるに、一同ドッと噴きいだせり。

翌五日は朝まだきに起き出でゝ、一同乘りこみの支度せり、杜番は船尾に、伊範の傍らに坐を占めぬ。伊範は此處にありて、舵を操るといふ。武安は莫科と共に船首に坐して、帆を掌どる。其の他諸人は、各自かもひ〳〵に占坐せり。既にして船は纜を解けり。一同は佛人○洞に向て、三疊の讃呼の聲を揚げて、之に別を告げぬ。船は徐ろに○○○○○○○○川を下りゆけり、アウクランド岡は次第に岸樹の背に沒して見ゑずなれり、童子等は皆な愁然としてなごり惜しげに、之

を目送せり。川の流の緩慢なるに、進潮の間は船を停めて休止せざる能はざれば、進行は甚だ遲々として、其のスロウ灣に達したるは、日已でに沒したる後なりき。杜番は船の沼澤林の下に繫泊せる間に、船の上より二隻の鴨を射獲せり。渠は初めて銃を放ちたるとき、病苦は銃聲と共に體を離れて、發散し盡くしたるやう、覺えたりと語りたり。

翌朝渠等はスロウ灣を拔錨して、船尾帆及び船首三角帆を挂けて、南方に乘り出だせるが、八時間の後は、島の南端たる南岬を邁ぐりて、ケムブリッヂ島の岸を洗ふ所の海峽に入りたるが、仍ほもアデレイド嶋の濱邊に沿ひて、南方に馳走するほどに、チエイアマン島は早くも北方地平線の下に沒して見えずなりぬ。

幸ひにして天氣晴和なりしにず、二月十一日には、既にスミス海峽を過ぎて、マゼラン海峽の口に入りたり。右方には聖アーン山高く聳へ、左方にはポウフホルト灣の窮まる處に、數個の戴雪の嶺、參差駢頭するを見る、嚮きに武安が欺騙灣より望み見たりし白點は、即ち是等諸嶺の中の最高なるものなりしなり。

船上の人は皆な壯健にして、杜番は眠食益す佳なり。翌十二日は、タマル島の前に來りしが、是時タマル港は荒廢して、人の住む者無ければ、渠等は空しく此處を過ぎて、南東に向ひて、海峽を乘りゆきたり。一方には、デソレーション島の、平匾不毛の陸影蜿蜒し。他の一方には、岸嘴出入參差せるクルーカー半島の濱邊見ゆ。

伊範の意は、ブロワード岬を過ぎ、ブランスウヰック半島の濱邊に沿ひ、パンタアレナまで往かむと欲したりしなり。然れども、渠等は復た遠く馳行するを須ひざりき、翌十三日の朝、偶ま船首に在りし左吡は、忽ち叫び出だせり「看よ、余等の右舷に一道の煙が」。吳敦「蓋し漁人の火なるべし」。伊範「否な、是れ滊船の煙なるべし」。いち早く檣頭に登りたる武安は「滊船、滊船」。既にして船の形望み見るべくなれり、船は蓋し八九百噸を容るゝなるべし、正さに一時間十一二マイルづゝを走りをれり。童子等は一齊に懽呼の聲を揚げながら、手に〳〵銃を把りて、連りに之を續け發てり。滊船は直に我が銃聲を聞き、我が船を見たり。十分間の後は、童子等の單檣船は、滊船の舷下に繫ぎ住

められぬ。濠船は名をグラフトン號と呼び、將さに濠洲に往かむとするものなり。船長ロングは童子等を本船に移して、其の遭難始末を問ひたるが、一昨年スロウ號失踪の事は、當時英米の新聞紙上に喧傳せし所にして、船長もかねて之を稔知し居たれば、さま〳〵に童子等をいたはりたるがうへ、己れの往かむと欲するはメルボルンなれども、路を變じて此よりアウクランドに直行し、以て童子等を其の故郷に送還しやるべしといひ出だせり。此より航海は迅速且つ平穏にして、同じ月の二十五日には、無事アウクランド灣に到着して、錨を投じぬ。顧みれば十五少年が、一昨年二月十四日の夜、此處を流れ出でゝより、今に至りて、恰も滿二年なり。

童子等の父母が、十五少年の皆な無事歸國したるを聞知せるときの、歡天喜地の狀は、何等の詞を以てするも、決して之を形容するを能はず。曰く十五少年皆な無事にして、一人の欠けたるなしと。新聞は電光の如く、闔市に遍播せり、闔市の人は皆な、十五少年の過ぐるを觀むと欲して、戸外に出でぬ。人が皆な聽かんをを欲するは、十五少年が漂流の始めより其の歸國の終りに至

るまでの歴史なり。杜番は幾回の講話會を開きて、其の顚末を講話せり。聽衆は毎回場に滿ちて、外に溢れぬ。馬克太が丹誠をつみて筆錄しおきし、漂流中の日記は出板されぬ。幾千又た幾千は、只だニウジランドの讀書社會の需用を充たすがためのみに、消にゆけり。幾ばくもなく日記は佛、獨、伊、露、及び日本の各國語に譯されて、各國の都邑に現はれたり、各國の讀書社會は皆な先づ賭を快となして、之を爭ひ購へり。抑も吳敦の愼慮、武安の慈愛、杜番の勇武、其他一同の耐忍剛毅、孰づれか讀む者をして敬意を起さしめざらむや。

圭兒及び伊範が、如何に一同に歡迎感謝されしかは、必ずしも贅するを須ひず。アウクランドの市民は、伊範のために義捐金を募集して、一隻の美くしき商船を買ひ、之にチユイアマン號の名を命じて、以て之を渠に贈れり唯だ之を贈れるときの約束に、渠は必ずアウクランドを以て其の故郷となすべしとのをなりき。伊範は固より喜で斯の約束に從ひたり。

圭兒に至ては、武安雅涅章格等の父母、各其の家に客とせむと欲して、互に相爭ひしが、渠は遂に杜番の家に引きとられぬ。蓋し杜番の一命は、全く渠の介

抱によりて救はれたりと謂はむも、不可なければなり。

余輩が諸君と共に、斯の十五少年の漂流譚を讀みて、學び得る所の訓へは即ち、慎慮慈愛勇武の三者有りて、之に兼ぬるに耐忍剛毅の德を以てすれば、人生何の難か排すべからざらむ、何の紛か解くべからざらむ、といふをなり。

十五少年 畢

明治二十九年十二月十日印刷
明治二十九年十二月十日發行

定價金參拾五錢

譯者 森田文藏

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所 熊田活版所
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

版權所有

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

亞非利加探險者スタンレー氏原著
五洲矢部新作君譯述

スタンレー探險實記

全二冊大判
紙數千餘頁
壹冊五錢
郵稅十二錢

世界未曾有の大冒險家スタンレー氏、深く亞非利加内地に入り、食人殘忍の蠻奴に接し、獰猛猛豺の棲窟を探り、屢々死して、屢々蘇す、當時氏の一擧手一投足の消息は、世界各國に電報せられて、一世の耳目を惹けり、幸にして芽出度英國に歸るや、其の實踐したる所を著はして、**大喝采を博せるもの**、即ち本書なり、本館之を譯して發刊せし以來、非常の歡迎を受く、其奇怪壯絶**天下の珍書**たるは、贅言を俟たざるなり

米國ダウグラス、フォーセット氏原著
山岸藪鶯君譯　再版

空中軍艦

全一冊洋裝
三百廿頁餘
正價廿五錢
郵稅六錢

世界奇書中の一大奇書として歐米の耳目を聳動せしめたる『空中軍艦』は、今や原著者に親交ある文壇の奇士山岸藪鶯氏の米國土産として我が讀者に紹介せられたり。其の趣向の神變奇妙なる、其局面の遠大偉絶なる、哲學機械學理化學天文學兵學航海術等の諸能力を兼ね具へて、而かも**大々的世界革命黨の總理**たる大偉人が、猛志を懷きて久しく瑞西の仙鄉に隱れ、經營慘澹遂に空中を自由自在に奔放馳騁する一大軍艦を發明し、歐米の豪傑を驅て此艦に乘り組ましめ、自ら艦長と爲りて空中を飛行し有らゆる利器を利用して宇内屈指の大都會を一刹那間に粉齏燼滅し了せんとす。讀來りて奇絶快絶殆ど卷を措く能はざるものあり、苟も長夜消閑の好伴侶を獲んと欲する者、宜しく此『空中軍艦』一本を讀むに若かず。

英國ライダー、ハッガード氏原著
卯の花庵主人 宮井安吉君譯述

大寶窟

全一冊大判
三百五十頁
正價廿五錢
郵稅八錢

ライダー、ハガード氏は、當今英國の文壇に於て有數の偉物、而して其　作の一を冒險小說「大寶窟」となす。其の曩きに世に出づるや、諸新聞雜誌爭ふて其の脚色の奇と　文章の妙を稱し、辭盡さゞるなし、是に於て英人誦み、米人誦み、英語を解する各國人誦み、倫　の「サーキユレーチン、ライブラリー」五萬部を藏して猶その不足を感ずるに至る、謂つべし偉なりと、篇中沈勇の士爵あり、怯弱のクオーターメーンあり、美人あり、黑蠻王あり、魔法使あり、金を溶かす沙漠去りて、雪を頂く山來り、奇癖の奴僕化して金冠の王となり、流血杵を漂すの戰亂畢て明珠堆をなす暗窟現はれ、血線の古圖三百年前の屍體日蝕魔狩白腦神像化石古金等、愈々出で丶愈々奇、起伏擒縱の妙讀む者をして應接に暇あらざらしむ。蓋し此書を讀まざるものは、未だ冒險の奇と小說の美を語るに足らざることを。

西班牙セルバンテス氏著
松居松葉君譯述

鈍機翁冒險譚

全一冊大判
三百五十頁
正價廿五錢
郵稅八錢

英國の大批評家が所謂『最高なる天才が作り爲したるもの丶隨一』として其名全世界に高く、殆んど三百年以前にありてすら、出版後一年を經ずして三版を累ね、十年にして八版に至り、英國のみにても、飜譯十回に及ばんとする、**世界一大奇書**『ドンキホーテー』は、今や松居松葉子の筆によりて、諸君の面前に現はれたり。蓋し此の書の變幻奇怪鬼神躍り、妖魔舞ところ、西遊記を讀むが如く、武勇剛健長蛇を斬り大軍を破るところ水滸傳に相似たり、その縱橫の詼諧忽地人をして頤を解かしむるは三馬一九に勝り、その纏綿たる情緒人をして腸を斷たしむるは、琵琶行想夫戀も遜色あるべし。想ふに讀者一度この書を繙かば、再讀三讀、幾讀を重ねて趣味いよ〳〵深く實に消閑の好伴侶たらん。

英國ブルワルド、リットン氏原著
益田克德君口譯

夜と朝

若林玻藏君筆記
富岡永洗密畫

全一冊大判
紙數三百頁
正價廿五錢
郵稅六錢

此書は英國稀世の人傑「ロールド、リットン」氏の傑作「ナイト、エンド、モーニング」を益田克德氏の口譯し、若林玻藏氏の筆述せられたるものなり、原書の價値は世已に定評あり、今りの慘澹奇拔の結構を、益田氏が流麗巧妙なる語勢を以て說出し、老練なる若林氏の筆寫せるもの、一の泛辭なく、一の虛語なし、自ら至妙の文章をなす、世に有ふれたる筆記體と、遙にりの趣を異にせり、森田思軒氏此書を以て我邦文學世界に一變を生ずるの前兆となす、誠に宜なり。

英國ヘスチング、マルクハム氏原著　幸田露伴君譯述

大氷海

全一冊洋裝
紙數百六十頁
正價拾五錢
郵稅六錢

スタンレー探撿實記と相俟つて、水陸冒險に於ける、世界の壯觀を極むるものは、本書大氷海なり、英國海軍アレルト艦長、大佐ヘスチングス、マルクハム公が、原文夙に歐洲に轟く。抑も一千八百七十五年英國に於てアレルト、並にチスガバリーの二艦を艤し、前人未だ曾て踏破せざる、全地球極北の氷海に大冒險を試みんとする大豪擧、如何に彼等は世界的偉丈夫として、其面目名譽と發揚するや、寒心昏絕すべき悲境、拍手大聲すべき快事は、譯者の靈筆敏腕によりて、更に一段の大精彩あり。事勢靡然として冒險を談るの今日、豈に此書の精讀を怠るべけんや。

獨逸カーヘレンドッフ伯原著　霧山人阪田孫四郎君譯述

なけものの

全一冊大判
紙數百八十頁
正價拾五錢
郵稅六錢

獨國文壇有數の詩人カーヘンドルッフ伯が幽邃なる詩想と艷麗なる筆とを以て、かき出せる「なまけもの」趣向斬新靈妙神變不可思議、庭師となり收稅吏となり道と失ふて友を得、友を失ふて金を得、古城に身命を危くして、公園に名譽を博し、貴女に辱められて羅馬を去り、畫工に伴はれて、維納に歸り、結局藝が身を助けて、戀人と偕老の契を遂く、其間密かになまけもの、相を穿ちて、或は空想に神を飛ばし、或は夢現に魂を迷はすなど、叙し去り叙し來て餘す處なく、滑稽洒落の中に、自然眞率の意を含みて、縱橫無盡に寫し出せる好小說、一本を求めて窓下に繙き給はゞ、讀一讀妙味愈深かるべし。

二十7X17

コサック兵

露國レフ、トルストイ伯原著
田山花袋君譯述

全壹冊大判　正價金拾五錢　郵稅六錢

高加索領の北、露領の最南端、一國あり、「コサック」州といふ、多く美人を產す、世界第一の稱あり、是を以て露國士官の「アプリーク」人防禦の爲めこの州に送られたるもの、大概鴛鴦の盟を兵馬倥偬の間に締せざる者なし、レフ、トルストイ伯は露國の詩人十九世紀錚々たる大詩人なり、而して其作「コサアク」兵は實にこの間の消息を陳べて神來の詩想を婉麗なる筆に描出したるものなり、讀來れば忽ちにして砲聲、忽ちにして美人、忽ちにして葡萄園下の逍遙となり、忽ちにして「アプリーク」人攻擊の出兵となり、忽ちにして戰鬪大叫喚少女の大血涙となりて了る、凄絶卓絶眞に不可言の妙あり

めをと

露國トルストイ伯原著
內田不知庵主人譯述

全壹冊大判　正價金拾五錢　郵稅六錢

魯國の文豪トルストイ伯が、傑作中の傑作にして、最も緻密なる夫婦の情愛を描きて、眞正なる愛、人生の至樂の何たるを示し、一棒華飾社會を喝破して、醇厚なる人生の福利を敎へ、懷疑社會岐路に彷徨せる、妙齡女子の指針を示し世間普通の戀愛小說を打破して、別に一生面を開く、純潔淸絕、家庭の讀本として、無比の絕好小說なり。

雅致
格子
女學
文化